涼宮ハルヒの発情

りりぅむ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルはあれですが、
中身は至って健全なハルヒとキョンの物語です。
高校生のときにモバゲー小説で執筆してたのですが、
二次創作ということで強制非公開にされていたので
ハーメルンに引っ越しました。
チョコレートレイト（前編）までが高校の時に書いたもので
そこから長い年月続きを書くことなく放置していました。
ですが２０２１年７月、なんとなく自分の小説を読み返していると

ハルヒのアニメが見たくなり、アニメを見ると
小説の続きを書いてみたくなったので
連載を再開してみることにしました。
『俺の中でハルヒは、まだ終わってねぇぇ!!!』（キョン風）

目次

クリスマスイヴの夜に ―――― 1
青春って何だろう ―――― 30
ＳＯＳ団始動 ―――― 52
涼宮キョンの憂鬱（前編） ―――― 76
涼宮キョンの憂鬱（後編） ―――― 109
チョコレートレイト（前編）※高校時代書いたのはここまで ―――― 145
チョコレートレイト（後編）※２０２１年７月連載再開 ―――― 189

クリスマスイヴの夜に

凍て雲が空全体を覆い、
冷たい北風が俺の体温をじわじわと奪っていく朝…
俺は今日も学校までの強制早朝ハイキングコースを
心ゆくまで満喫していたのだが…
言わせてもらおう。
寒くて死にそうだ。
流石は１２月と言った所か。
こうなると手編みのマフラーの一つや二つ（？）は欲しくなる所なのだが…
まぁ、ＳＯＳ団なんぞという訳の解らない部活に所属していようものなら、
彼女なんて出来るはずもなければ
手編みのマフラーにありつく事さえ不可能だろう。
こうなったら愛しの朝比奈さんに縋るしかないな…

なんて考えているうちに見慣れた教室に到着した。
さて、「あいつ」はどうしているのだろうか。

教室に入るや否や、不機嫌オーラを八方に放ちながら
窓の外を眺めるハルヒの姿が目に飛び込んで来た。
予想はしていたが。
『よう、今日も不機嫌そうだな。』
『寝不足だから疲れてんのよ。』
と頬杖をついて言う。
まぁいつもの事である。
『疲れてるようには見えないがねぇ。』
うるさいわねぇなどと反論しつつも、何か思い出したかのように、
『あ、そうだ。もう今年も終わりでしょ?
そこでよ!!我がＳＯＳ団も何か１年を締めくくる活動をしようって考えてる訳。』
締めくくる?

俺にはまともな活動をした記憶がないのだが。
『キョン、何かいいアイデアない？』
目の中のお星様をキラキラと輝かせて俺に顔を近づけるハルヒ。
うーむ…、悩み所だ。
仮に朝比奈さんのコスプレパーティーがいいなんて言おうものなら、
ハルヒの痛いツッコミが俺のピュアなハートをめった刺しにするだけだろうし？
今回はやめておく事にする。
『そうだなぁ。クリスマスパーティーなんてどうだ？』
『そんな事したって何にもなんないでしょ。』
口をへの字に曲げる。
そんなに嫌か、普通に年を越すのは。
『あ、そうだ！あれがあったわ！』
頭の上に電球マークを浮かべながら、一人で勝手に盛り上がっている。
そんなハルヒを尻目に俺は不安を募らせていた。
またとんでもない活動に付き合わされるのは御免だからな。
『あ、詳細は放課後部室で話すわ。絶対来なさいよっ!!』
行きますとも。

行かなきゃ死刑だろうしな…
まあそれはいいとして、
ハルヒのやつ何を思いついたのだろうか…

放課後、俺は文芸部…いや、ＳＯＳ団の部室に向かった。
ドアをノックする。
『はぁ～い。』
部屋の中から天使の声が聞こえた。
朝比奈さん、どうやら今日はハルヒに脱がされていないようだ。
『こんにちわ、キョン君。』
口元から純白の輝きを発しながら俺に話しかけて来たのは誰であろう古泉だった。
歯が白い、眩しい、口を閉じろ。
長門はもはや風景の一部に溶け込み、いつも通りハードカバーを読んでいる。
『よう、ハルヒはまだなのか?』
俺はハルヒがまだ来ていない事を不思議に思いながら、笑みを浮かべてこちらを伺っ

ていた古泉に問う。
『それがまだみたいなんですよ。』
『そうか。』
あんなに張り切っておいて自分は最後に登場か…
それから数分が経過し、
俺は朝比奈さんの煎れてくれたお茶を味わっていたのだが、
突如大きな音を立てて部室のドアが開いた。
長門以外の首が一斉にそちらを向く。
『全員集合してるわねぇ!!
今日は我がＳＯＳ団の１年を締めくくる活動の詳細を説明するわよ!!』
団長のお出ましだ。
今回の活動は一体どんなものなのだろうか…
そんなこんなでハルヒは話し始めた。

『これよこれっ!!』

そう言うと、何やらわからん紙を俺達に自信たっぷりに見せつけてきた。
『寒さに負けるな!!雪合戦大会…ですか。』
紙に書かれている大会の名称を不思議そうに読む古泉。
『そうよ!この前の野球の大会じゃ優勝出来なかったから
今度は雪合戦大会で優勝してＳＯＳ団の名前を広めるのよっ!!』
またいつもと同じパターンか…
まあ、こいつと出会ってからもう半年も経つんだから、流石に慣れっこになってしまったが…
『で、大会の詳細は?』
『大会は２４日の１５時から行われるわ。参加対象は子供から大人まで。
対戦相手は年齢別に分けられていて、あたし達は成人の部よ。』
よりによってクリスマスイヴに大会とは…
イヴくらい女の子と甘い時間をだな…
『対戦形式は５ｏｎ５だからあたし達でちょうどでしょ。』
まあ長門がいる限り負ける気はしないが…
『みんな異論はない?』
ハルヒを除くメンバーは暗黙の了解と言った所か、誰一人口を開こうとしない。

異論を申し立てようものなら、ハルヒがまた不機嫌になる事くらい目に見えているのである。
『決まりね!!って事で今日から特訓よっ!!』
おひ…
『確かに外は寒いがまだ雪は降ってないぞ。』
『…じゃあ雪に代わる物を使って練習するしかないわね。』
まさか野球の硬球で練習しようなんて言うまいな…
『こうなったらテニスボールで練習しましょう。みんな、今からテニス部にボール借りに行くわよっ!!』
軽妙な足取りで部屋を出て行くハルヒを俺は止める気にもならなかった。
結果は初めから解っている。
こうして俺達（ハルヒ）はテニス部でボールを借り（強奪）て早速練習をする事になったのだが…
言っていいか？
やれやれ。

『ちょっとみくるちゃん！ちゃんと避けなさいっ！』
『ふぇぇ～／／／』
男子テニス部からまんまとボールを奪ったハルヒは、テニスラケットを用いて言わばノックのような練習を始めた。
ノックと言ってもボールを受ける訳ではない。
正面に飛んで来た時には変な宗教も顔負けの動きで回避しなければならない。
そして、俺達だけではなく男子テニス部の奴らまで参加させられているのは何故なんだ？
『古泉君、いくわよ!!』
ボールは空中で曲線を描いた後、剛速球と化して飛んでいく。
無論、ハルヒが全力でボールをミートしているのだが。
しかし、古泉は器用なもんだ。
ハルヒの剛速球を全て避けやがる。
流石は神人の攻撃を毎日のように避けているだけの事はあるな。
『やるわねっ…。次は有希よ!!』
そう言うと、長門に対しても容赦無しにボールを打ち込む。

『……』

ボールはぼっ立ちの長門の顔の横をかすめた。

あれはハルヒのコントロールが悪かっただけなのかそれとも…

なんて考えていた俺を突如襲ったのは、例の剛速球だった。

『ぐはっ!!』

『何ぼーっとしてるのよっ!!バカキョン!!』

ハルヒは左手を腰に当て、

顔面にボールの痕がついた俺をあからさまバカにするような目で見つめた後、

ラケットの先を俺の顔に突きつけた。

くそぅ。

この様子じゃ大会当日まで体が持たねぇな…

お知らせしよう。

俺達は地獄の特訓に数日間耐え、

今日（こんにち）生きて大会当日を迎える事が出来たのだ!!
俺よ、よく頑張った。
３日前から急に降り出した大雪によって、無事に大会は行われる事になったのだが、中止になって欲しかった気もする。
『みんな、今日は頑張りましょ!!ん?有希はまだ来てないのかしら…。』
ジャージ姿にマフラー、防水手袋を着用して準備万端のハルヒが言う。
『あ、あのぉ～…』
寒そうに身を縮こまらせ、か弱い声を漏らしているのは誰であろう、朝比奈さんだ。
『どうしたのみくるちゃん?』
『わ、私だけ何でこんな格好なんですかぁぁ…?』
正直言って、季節にぴったりな格好をしているが、耐寒性が低過ぎやしないか?
まあ、これはこれでそそられていいのだが。
『みくるちゃんのｓｅｘｙサンタ姿で相手の戦闘意欲を削ぐ作戦よ。』
『そんなぁっ…／／／』
目に涙を溜めた朝比奈さんは、助けてと言わんばかりに俺を見た。
頑張れ朝比奈さん…
寒さに耐えるんだっ…

（ｓｅｘｙサンタ姿はみなさんのご想像にお任せする事にしよう）
それにしても、未だ長門の姿が見えない。
どうかしたのだろうか。
結局、長門が現れないまま開会式が始まった。

対戦相手は高校生のチームであった。
俺達の試合までは時間があるが…
『長門の奴、どうしたんだろうな。』
『携帯にかけたけど出なかったのよ。これはもう読書禁止令発令ね。
部室で読書は禁止、みたいな。』
部室は元々文芸部のだろうが。
と心の中でツッコんでいたその時、俺はふと視線を感じた。
すぐさま視線を感じた方に目をやると、
そこにはトイレの陰から手招きしている古泉の姿があった。
『ハルヒ、ちょっとトイレ行って来る。』

『あんたまで逃げ出すんじゃないでしょうねっ!?』
『逃げたらどうなるか解ってるから逃げねぇよ。』
何よそれと言わんばかりの表情を浮かべるハルヒにしばしの別れを告げ、
俺は足早に古泉のもとへと向かった。

『どうした?』
『今日の大会ですが、前回の野球大会と同様に
涼宮さんの精神を安定させなければなりません。』
『だろうな…。やはり今日も長門の力で勝つ作戦でいくのか?』
『ですが、先程彼女から連絡があったのですが、
今日は大会に来れないようなのです。』
ななな何だって!!?
『何で来れないんだ!!?』
『詳しくは解りませんが、何か涼宮さんの観察以上に重要な事情があるようですね。今日は長門さん抜きで勝たなくてはいけないようです。』
『人数が足りないんじゃ…』

焦りを隠せない俺をよそに、古泉は爽やかな笑顔で、
『こちらは4人で出場という事になりますかね。』
冗談じゃない!!
長門抜きで雪合戦に勝てる可能性なんて皆無だっ!!
『どうすればいいんだよ。』
『白雪姫って知ってます?』
『断じて断る!!』
あれは夢の出来事だ…
現実で俺とハルヒがあんな事になるなんてまず有り得ない。
『死ぬ気で勝ちにいくぞ、古泉。』
『はい。』
長門抜きで勝たねばならないと考えると、俺は腑が抜けた。

『ねえキョン、もうすぐあたし達の出番っていうのに、
有希ったらまだ来ないのよ?一体何考えてるのかしら。』

『ん、あぁ、そ、それなはだなぁ…』
『長門さんは急用で来れないらしいんですよ。』
あたふたしていた俺を見兼ねたのか、
古泉が横から割り込み、ハルヒに事情を説明した。
『なんですって!?あんなに特訓したっていうのにっ!?』
『まあまあ、長門にも事情ってもんがあるだろ。今回は４人で頑張ろうぜ。
長門は居ても居なくてもあんまり変わらんだろうし……なっ？』
実際いないとかなり痛手なのだが…
『んもう、仕方ないわね…。
有希がいない分あんたが頑張りなさいよ！負けたら殺すからっ!!』
ハルヒは切歯扼腕《せっしやくわん》して俺を指差した。
凄い意気込みだな。
『まあ精一杯頑張るよ…。』
と適当に流し、俺は相手チームに目をやった。
正直言って勝てる気がしなかった。

『みんな、いくわよっ!!』
ハルヒの高らかな掛け声と共に闘いの幕があがった。
『お、お～。』
俺だけに言わすなっ
そして、ハルヒは試合開始の笛が鳴るや否や、雪を固め、鋭い雪の弾丸を放つ。
これには敵も驚きを隠せないでいた。
俺も頑張るか…

ハルヒの活躍もあり、
というか、ハルヒが一人で敵を蹴散らしていったおかげで
俺達は3回戦まで勝ち抜き、気が付くと決勝の舞台に立っていた。
『次は…ＳＯＳ団対、白ニーハイズの試合です！』
相手は大学生５人で結成されたチームだった。
…ツッコミ所満載だが、めんどくさいからやめておく事にする。
『いよいよだな。』

『そうね。頑張りましょ…』
俺の問い掛けにハルヒは呟くように答えた。
なんだ？
やけに静かだな。
もしや、あの肝が据わりまくったハルヒが緊張しているとか？
それはないか。
そんな事を考えている内に、
ヲタっぽい雰囲気を醸し出す白ニーハイズとの決勝戦が始まった。
しかし試合開始直後、
『ぐおっ！』
余裕綽綽で雪を拾っていた俺の目の前は、突如白一色に統一された。
『あんたねぇ…、やられるの早過ぎなのよ！』
俺は不覚にも遠距離から来た雪に気付かずアウトになってしまった…
まあ3セット先取で勝利だから大丈夫…だよな？
なんて思っていたのだが…
やはり俺が抜けたせいか、戦局は明らかに敵チームへと傾いていた。
そして気が付けば、

『えっ?な、何ですかぁ～っ』
陣地内の後方にある雪の壁に隠れ、
おろおろと怯える朝比奈さん1人を残すだけとなっていた。
『みくるちゃんっ!早く敵をやっつけなさいっ!』
ハルヒの叫びも虚しく、敵は怯える朝比奈さんには見向きもせず、
楽々と俺達のフラッグを掴み取った。

1―0か…
『あんたねぇ…真面目にやりなさいよ…。』
ミーティングタイムの間に、頬を紅く染めたハルヒは俺に説教をくらわした。
そんなにマフラーを引っ張るな。
首が締まる。
『いや、さっきのは事故だ。そう、事故ったんだ。』
『言い訳なんて聞きたくないわ。次はちゃんとしなさいよ…。』
『わかった。次はミスらないさ。』

流石にもう一度即アウトになろうものなら、
ハルヒは本当に閉鎖空間を生み出しかねん。
頑張れ俺…

こうして俺達は人数が少ないにも関わらず、
第2、第4セットを取り、なんとか2―2まで持ち込む事に成功した。
これを奇跡と言わず何とと言う。
『ふう…長期戦はキツイな…』
確かに寒いはずなのに、何故だか汗が止まらん。
これはさすがの俺（？）でもかなりキツイ…
『キョン君、』
古泉がヌーっと俺の横に現れると、ハルヒに聞こえないように耳打ちした。
『このセットで全て決まります。つまり閉鎖空間に神人が出現するか否か、
はたまたこの世界とあちらの世界が入れ代わってしまうかどうかがね。』
『あぁ。分かってる。それだけは御免だ。』

絶対に負けられない最終セットの開始を告げる笛が鳴り響いた。

俺達（朝比奈さんは除く）は疲れきった体を酷使してひたすらに雪を投げる。
敵も相当疲れているらしく、球の勢いは確実に落ちていた。
そんな中、
『痛いっ！…』
相手の投げた雪が最後尾にいた朝比奈さんに命中した。
『ご、ごめんなさいっ。やられちゃいましたっ…。』
申し訳なさそうに俺に頭を下げる朝比奈さん。
潤む目に見つめられ、昇天してしまいそうになりつつも、
『大丈夫ですよ。後は任せて下さい!!』
と強がってみたが…
戦況は５対３。

明らかにこちらが不利だ。
まあ朝比奈さんを戦力に数えてよかったのかは疑問だが。
しかし、俺達は悪戦苦闘しながらも順調に敵を倒し、残す所敵1人となった。
俺達が勝利を確信し始めたその時…
『ぐっ!!』
敵のがむしゃらに投げた雪が古泉を捕らえた。
『古泉っ!!』
『くっ…やられてしまいましたか…。後は…頼みましたよ…。（ガクッ）』
『古泉ーっ!!!』
って、なりきってる場合じゃねぇっ！
『ハルヒ！あと1人だぞ!!』
『分かってるっ…』
そう言って雪を掴もうとして屈むハルヒ。
しかし、その隙を逃すまいと敵は大きく腕を振りかぶり、
ハルヒに向かって全力で雪を投げようとしていた。
あの体勢では敵の攻撃を避ける事は不可能だ。
…って言うか、ハルヒが敵の攻撃に気が付いてない!?

まずい…、頭に直撃する!?
気が付けば俺は、驚異的な跳躍力でハルヒの前に飛び込み、
敵の投げた雪を掻き消していた。
と同時に、何が起きたか解らずにいたハルヒは、
咄嗟に隙だらけの敵に向けて雪をほうり投げた。
が、無情にも雪は敵を捕らえる事はなかった。
敵はもう片方の手で握り締めていた雪を、
隙だらけのハルヒに向けて投げつける。
無論、避けられるはずもなく、雪はハルヒの体に当たって、砕けた。
『ゲームセット!!』
…負けた…のか…
暗澹たる表情を浮かべた古泉と朝比奈さんが直ぐさま駆け寄って来る。
『くそっ…、もう少しだったのに…。ハルヒ…すまん。』
俺はハルヒの罵声を浴びる覚悟で頭を下げる。
『負けちゃったものは仕方ないわね…。』
…?
特に怒る様子もない。

落ち込んでいるのか？
こうして、長門の情報操作なしで臨んだ雪合戦大会は、
優勝を逃すという形で幕を下ろした。

日はすっかり暮れていた。
更衣室で着替えを済ました俺達は微妙な面持ちで帰路についていた。
『では、キョン君、僕と朝比奈さんはこっちなので…。』
『あぁ。』
『大変な事が起こらなければよいのですがね…。』
古泉は苦笑しながら呟いた。
こうして俺は古泉と朝比奈さんに別れ、ハルヒと2人きりになった訳だが…
……
おかしいな…
優勝を逃したっていうのに、ハルヒは文句を言わないどころか黙り込んだままだ…
そういえば最終戦の時も元気がなかったような…

そんなハルヒを見兼ねた俺は、
『ハルヒ、一体どうしたんだ？疲れてるのか？今日のお前はお前らしくないぞ…？』
『全然平気よ…。』
どう見ても平気には見えなかった。
『お前本当にどうし…』
俺が声をかけたその刹那、ハルヒはマリオネットの糸が切れたかのように、
雪がうっすらと積もった地面に倒れ込んだ。
『お、おいっ!!』
…これは？
…何だ？
…夢じゃないよな？
こんな光景想像した事もなかった…
あの超元気で、うるさくて、糞生意気なハルヒが…？
……
……
……
……嫌…だ…

『おい…、おいっ!!しっかりしろっ!!』
俺は無我夢中でハルヒの体を揺する。
そして、ふいに額に手を当てた。
なんだこれは…
すごい熱…そして呼吸も乱れている。
こいつ…こんな体で頑張ってたって言うのか!?
『なんで…、なんで俺に言わねぇんだよ…ばか野郎…』
『…う…』
…!?
『っさい…』
…え?
『うっさいわね……バカキョン…』
目の焦点が合っていないのか、ハルヒは虚ろな目で俺を見た。
『お前なぁ…。今救急車呼ぶからな…。』

『いい…、自分で帰れるから…』
などと言い張るハルヒの体を俺はゆっくりと起こしてやる。
『無茶するなよ…。第一、どうして俺に言わなかったんだ!?』
ハルヒは鼻で嘲る《あざける》ように笑った後、こう言った。
『…あんなにみんなに色々言っといて、
あたしの体調が理由で棄権なんて事になったら……団長の面目丸潰れじゃない…』
お前って奴は…
そんな時にまで意地を張る必要なんてないだろうが…
もしお前に何かあってからでは……遅いんだぞ……？
…何か…？
……俺は……

……俺は……
『俺はお前が倒れた時…、お前が目の前から消えてしまうんじゃないかって…』
『…えっ？』

ハルヒは驚いたように目を開き、俺を見つめている。
…俺は何を言っているのだろうか。
『あぁ…な、なんでもない!!とにかく救急車だっ!!』
『…本当にいいからっ。』
そう言うと、屈んでいる俺の肩に手を掛けて立ち上がろうとする。
しかし、自力では立ち上がれないようだった。
『ほ〜ら、言わんこっちゃない。どうするんだ?』
呆れたように俺が訊くと、ハルヒは目線を地面に積もる雪へと移し、
囁くように言った。
『……おんぶして。』
……
予想外の台詞に一瞬時が止まったかのように思えた。
俺は、淡桃色《たんとうしょく》の唇を軽く噛み締めながら俯くハルヒを眺め、
呆れたように言ってやった。
『分かったよ。俺の背中に乗れ。』
全く、世話の焼ける団長さんだな…なんて考えながら
足元の覚束ないハルヒを背中に担ぐ。

『お前の家、どこなんだ?』
返答はない。
聞こえて来るのは微かに漏れるハルヒの吐息だけだった。
『なぁ、言わなきゃ送れないだろ?』
『……言わなきゃずっとこうしていられるの?』
…!?
『…お前っ…』
『冗談よ。』
いたずらに鼻で笑う。
こいつ…
『家ね、結構遠いわよ。』
遠いのかよ…
俺は疲れ切った体でハルヒの自宅へと歩み始めた。

何でこんなにも体を酷使せにゃならんのだ…、などと俺は茫然自失していた。
でもまぁ…

こいつと二人っきりのクリスマスイヴってのも悪くない…か…
なーんて考え、俺は思わず自嘲の笑いを漏らした。
『なぁハルヒ…。』
『…何よ。』
『お前、重いな…。』
『あんたねぇ……覚えときなさいよ…!?』
足をじたばたさせて反抗する。
まるで父親におんぶしてもらってる女の子だな。
『ハハハ。冗談だって。』
『明日死刑だから…』
明日…
明日にはいつもみたいに元気なハルヒに会えるのだろうか…
いや、今みたいなハルヒも…たまにはいいか…

雪がちらつき始めたクリスマスイヴの夜…

結局この日、神人が現れる事は愚か、
閉鎖空間が生まれる事すらなかったのは
言うまでもない。

青春って何だろう

あのクリスマスイヴから数日が経った今日、俺は新年を心待ちにしていた。
言うまでもない。
今日は大晦日である。
俺はここ数日間、ハルヒのいない静かな冬休みを満喫していた。
それは、自分が一般人であることを再確認するには十分な時間だったのだが…
俺の日常ってこんなものだったのか…？
あいつと出会ってからの日常と、今まで俺が過ごしてきた日常では天地の差だ。
久々にこんな平凡な日常を過ごしてみたが、どこか物足りなさを感じるのは俺だけだろうか…
まあ、冬休みが終わりを告げた瞬間嫌でもあいつに引っ張り回されるんだろうから、今の内にＨＰを回復させておくのも悪くないだろう…

さて、紅白でも見るか。
俺がおもむろにリモコンに手を伸ばした瞬間、携帯が震え出した。
こんな時間に電話なんて…
見ると発信元はハルヒだった。
『どうした?』
『ねぇキョン、今から初詣に行くわよっ!!』
なんですとぉ~!?
『いや…俺は年越しは家でするつもりだったんだが…、こう…年が変わる瞬間にジャンプなんかしてだなぁ…』
『ＳＯＳ団みんなで初詣に行こうと思ったんだけど、みくるちゃんも古泉君も有希も行けないって言うからさぁ。最後に超暇人なあんたに電話したって訳。』
超暇人は余計だろ…。
俺みたいな生活は全国的に見たとしても、割り合い普通な人間に分類されるはずだと思うぞたぶん…
『そうか…。そういやハルヒ、風邪は治ったのか?』
『そんなもん余裕で治ったわよ。』

あんなに死にかけてたのによく言う…

『で、行けるの？行けないの？行けないんだったら一人で不思議な事でも探しながら初詣してくるけど？』

マジかよ…。

一人で初詣なんてするなら家族と行けよ…。

こいつには世間で”友達”と呼ばれるものは一人もいないのだろうか…

『わぁったわぁった。行くよ。』

『じゃあ今から北口駅前集合ね！』

って今何時だ？

ふと時計を見ると年が変わるまであと1時間という所だった。

『りょ～かい。』

『じゃ！早く来なさいよ!!』

そう言うと電話は乱暴に切られた。

やれやれ。

準備すっかな。

こうして俺は、この寒さと眠さに南極で遭難している光景を重ね合わせながら雪がちらつく外に繰り出した。

さて…北口駅前に到着した訳だが…
俺は自転車を駅の近くの電柱の脇に留めた。
あいつはもう来ているのか？
俺は疑念を抱きながら駅前を見渡す。
……
……いた。
『キョンー遅いわよっー』
そこには腕を組み仁王立ちしているハルヒの姿があった。
あんなにまったりのびのびリラックスムードで寝癖爆発かつ意識朦朧の中、ここまでこの短時間で来れたのは奇跡と言っても過言ではないぞっ。
『割りと早かっただろうが。』
ハルヒはしかめっ面をしているが、どこか楽しそうに見えたのは俺だけであろうか…
『まあいいわ。行きましょ。』
『神社か？』

『そうよ。一年の始まりは初詣からでしょ！』
お前の事だからてっきり初詣なんてめんどくさい!!とか言うかと思ったが。
『そうか。では一つ聞かせてくれ。なんで家族とは行かないんだ？』
『まあいいじゃない。そんな事。』
一掃!?
『はぁぁ…。そいじゃぁ行きますか。』
俺は暗い面持ちで神社へと歩き出した。

ようやく神社に到着した訳だが、夜中にも関わらず大勢の人がいたのは予想外だった。
それに…
『カップル多いな。』
『そうね。うらやましいの？』
『べ、別に。』
全くうらやましい限りだ。

みんなそれぞれ隣にパートナーがいて、幸せそうに歩いている。
まあ未婚既婚は問わない事にするが…
で…俺の隣にいるのは…
『ふ～ん。』
こいつは…
こいつは俺の事をどう思ってんのかねぇ…
……
ちょっと待てよ…
まず俺自身がこいつの事をどう認識しているのだろうか…
……
『何ぼーっとしてるのよ。』
『いや、何でもない。』
『まだ寝ぼけてんの？』
逆に言わせてもらおう。
まだ一睡もしてない…
そんなこんなで賽銭箱の前までたどり着いた。
『そうだ。お前は何をお願いするんだ？』

『決まってるじゃない!!ＳＯＳ団に何か不思議で楽しい事が起こりますようにってお願いするのよ!!』
俺はＳＯＳ団に所属してから十分不思議な体験をしてきたが…
『そうか。』
俺は何をお願いしようか…なんて考えながらふと横に目をやると、軽く俯きながら目を閉じて、手を合わせて真剣にお願い事をするハルヒの姿があった。
…俺もお願い事するか。
俺は財布から１００円を取り出し、ほうり投げた。

初詣を済ました俺達は、行く宛もなくただ街をほっつき歩いていた。
夜中だっていうのに沢山の人が行き交っている。
『ねぇキョン、あんた何お願いしたの?』
『秘密だ。』
『何よそれ。』
ハルヒはふんと向こうを向く。

『なあ、お前今年もＳＯＳ団で大暴れするのか？』
　俺が質問するや肩にかかる髪をハラリと払い、真っ黒な瞳を輝かせて言った。
『別に去年から暴れてなんかないわよっ！でも、今年も世界をおおいに盛り上げていくつもりよ。』
『盛り上がってるのはお前だけじゃないのか？』
『うるさいわね。まあ、あんたは今年も暇だろうし？ＳＯＳ団で頑張りなさいよ。』
　彼女もいないし部活もしてない（？）俺は暇じゃないと言えば嘘になるが…
　なんだか聞き捨てならんなぁ…
『今年こそはそこらへんのいい男でも捕まえて女子高生らしい学園生活を送らないのか？』
　俺はわざと2周目の話をしてやった。
　ハルヒはあからさま不機嫌そうな顔をして、
『だからぁ～、前にも言ったけど男なんかには興味ないのよ！しかもＳＯＳ団もやっといい感じになってきたっていうのに…。』
『ＳＯＳ団がお前にとっての青春ってやつか？』
『まあ…そんな所かしら。まだ全然満足してないけどね。』
『そうか。』

俺の高校3年間はこんな感じで過ぎていくのだろうか…
あぁ、俺の青春よ…

そんなこんなで俺達は近くを流れている川の河川敷にやって来た。
この川沿い…懐かしいな…
そこは俺が初めて朝比奈さんに衝撃告白をされた場所だった。
『朝比奈さん…』
『何か言った？』
『い、いや、何も。』
『ならいいけど。あ～、それにしても寒いわねぇ…。ん？』
ハルヒが向こうの方に目線を向ける。
なんだなんだ？
俺もハルヒの目線の先に目をやった。
距離が縮まると共にその”誰か”がハッキリと姿を現した。
女の子…？

それは俺達と同い年かそれより下かと思われる、黒髪にポニーテールの女の子だった。

こんな時間に一人で何をしているのか、俺にはさっぱりわからなかったが、ただ一つ解る事と言えば…

右手に刃渡り１５ｃｍはあるかと思われるサバイバルナイフを握り締めてこっちを見ている事だろうか…

っておひ…ちょっと待てよ…!?

『ねぇ、キョン、あの子ナイフ持って…』

あぁ、分かるさ。

ハルヒの言いたい事は…

あの子…

笑ってる…

何なんだ…一体…

『見ーつけた。』

黒髪かつポニーテールで幼い顔をしている、ストライクゾーンど真ん中の女の子は俺を指差して笑った。
『キョン、誰なのよ…。』
いや…全く見覚えがないんだが…
『あの～…どちら様ですか？』
俺は彼女を刺激しないように恐る恐る聞く。
下手に動くと襲って来るかもしれん…
『あなたを殺しに来た者よ。』
あ、そうなんですか。
…って、えぇぇぇぇ!!!?
『よく理解出来ないんですけど…』
『だからあなたを殺しに来たのよ。あなたを殺して涼宮ハルヒの出方を見る。ふふっ。この台詞にも聞き覚えがあるでしょう？』
まさか…
『じゃあ死んで。』
うおっ!!?
彼女はナイフを両手でしっかりと持ち、その歯先を俺に向けた。

『ちょっと待てって!!お前の目的はなんだ!?』
『朝倉涼子と一緒よ。あ、時間稼ぎしようったって無駄よ。』
『うわっ!!』
彼女のナイフが俺の胸の前で空を切る。
…まずい…、まずいぞ…。
長門は何をしてるんだ…。
早く来てくれ…
『無駄。』
気が付けばナイフは目まで迫っていた。
殺られる…
俺は目をつぶった。

ん?
俺は恐る恐る目を開けた。
そこには黒髪の女の子の右手を掴んでいる人の姿があった。

言うまでもないだろうが、そこにいたのは長門だった。
『長門!?来てくれたのか!!』
『あなたは私が守る。』
『有希!?何でここに!?……もう、何なのよ!!意味わかんない!!』
ハルヒは相当混乱しているようだ。
まあこの状況では無理もない。
ここで真実を知らないのはハルヒだけなのだから。
『邪魔が入ったようね。まあいいわ。』
彼女はそう言うと一旦後ろへ下がる。
『ハルヒ、下がっとけ。』
『えぇ…』
俺の命令にハルヒは素直に従った。
俺はハルヒが後ろへ下がったのを確認して後、長門に疑念をぶつけた。
『なぁ長門、あいつってもしかして…』
『私、そして朝倉涼子と同じ、対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス。』
やはりそうだったか…

『…聞いて。』

続けて長門はハルヒには聞こえないよう小声で呟いた。

まぁ元々小声な訳だが。

『今から起こる事は涼宮ハルヒに見られてはいけない。そこであなたの協力が必要。今この地点から半径２０メートルの空間は彼女の制御下。逃げられない。』

確かに、今から繰り広げられるであろう宇宙人の壮絶な戦いなんか見たらハルヒは新しい世界を創造しかねない…

『じゃあ俺はどうすれば?』

『…目隠しして。』

め、目隠し!?

なんという初歩的な策だろうか。

しかし今はそうする他なさそうだ。

『何コソコソ喋ってるの?どっちにしろあなたに私は倒せない。』

そう言い終えると、体から光を放ち始めた。

次の瞬間、俺は後方にいるハルヒに向かって走り出していた。

間に合えっ!!
俺はハルヒに飛び掛かり…押し倒した。
『ちょっ!!いきなり何すんのよっ!!』
押した倒すと同時に、爆音が響き渡った。
今の爆音はどっちの宇宙人のものだ?
まあそんな事はどうでもいいか…。
そんな事より…
この体勢…、なんか勘違いされてもおかしくないな…
『一体何が起こってんの?ちょっとキョン、どいてよっ!!見えないじゃない!!』
そんな事はお構いなしに俺はハルヒの目を手で覆った。
『ちょっと…何なのよ…』
『ハルヒ、動くなよ。動いたら…』
『…動いたら…何なのよ…』
ハルヒの声から明らかな動揺が感じられた。
『…動いたら死刑だからな。』
『何言ってんのよバカっ!!』

『あ～、とりあえず動くな。』
もがくハルヒを静めるべく、俺は最終手段に出る事にした。
俺は目隠しをやめて、ハルヒの脇の下に両手をつき、覆い被さるような体勢に変更したのだ。
この体勢なら目隠しをせずともハルヒには俺しか見えない。
『ちょっと…、キョン?』
ハルヒが動かなくなった。
そりゃあこんな体勢になったら動けないだろうが、それ以上にこの顔の近さと言ったら…。
なんだって俺自身が動揺してるんだっ…
『…動いたら、死刑だからな』
ハルヒの目をしっかりと見つめて俺は呟いた。
『わ、わかったわよ…。』
暗くてよく見えなかったがどこかしらハルヒの顔は赤らんでいたような気がした。
そんな中、後ろでは宇宙人対決（?）が繰り広げられている模様で、先程から爆音が響き渡っている。
長門…早く終わらせてくれ…

ハルヒの視界に戦闘の情景を映さぬように俺はずっとハルヒを見つめていたのだが、ハルヒはおもむろに目を反らした。

……

辺りが静かになった。

俺は後ろを振り返る。

そこは先程まで戦いが繰り広げられていたとは思えない程キレイで、何の変哲もなかった。

ただ…

『長門!?』

長門が俯せで倒れていたのだ。

俺は直ぐさま駆け寄る。

『大丈夫か!?』

『…肉体の損失は大きい。でも、大丈夫。』

…大丈夫には見えねぇよ。

長門の体からはまたもや大量の血が流れ、あちこちに火傷のような跡があった。

『今救急車を…』
『…いい。肉体を再構成する。』
『そ、そうか。こんな所ハルヒが見たら……』
ハルヒが見たら…？
まずいっ!!…戦闘が終わった事に安心してハルヒを解放（？）してしまった…
長門の肉体の再構成が未完了なのは想定外だった…
俺は諦めにも似た気持ちになりつつ、ハルヒが立っているであろう後ろを見た。
『何なのよ、もうっ！』
そこには満面の笑みでハルヒの目を隠す古泉の姿があった。
『古泉!?お前来てくれたのか!?』
『通りすがっただけですよ。』
嘘つけ…
俺はしばらく古泉ｖｓハルヒを眺めていた。
すると…
『…終わった。』
後ろから小さな声が降ってきた。
『長門！もう大丈夫なのか？』

『…大丈夫。』
『よかった…。いつもありがとな。』
『…いい。』
こうして朝比奈さんを除くＳＯＳ団が集まった訳だが…
『離しなさいよっ』
古泉が長門に目線を送ると長門は小さく頷いた。古泉はハルヒから手を離す。
『あぁー、もう！古泉君といいキョンといい、何なのよっ！』
『何でもねーよ。』
『何でもないなら何で目隠しなんてするのよ！あたしに見られたらまずい事があったって言うの？あたしは団長よ!?団員の事を把握しないといけないってのにっ』
ハルヒは腰に手を当て、イライラ度６０％増（前日比）で俺達に疑問をぶつけた。
しかし、そこは古泉の巧みな口さばきと爽やかスマイルでなんとかやり過ごしたのだった。

それから、ハルヒのイライラも収まり始めた頃…

『では、僕達はこれで。』
そう言い残し、古泉と長門はどこかに去って行ってしまった。
『変なの。』
ハルヒは不満げな様子で唇を噛んでいる。
『まあ、気にするなって。』
『そんな事言われたら余計に気になるわよっ。まぁ、気にした所でどうせ教えてくれないんでしょうけど。』
話が解るな。
それにしても、今日の宇宙人は可愛かったな～……じゃなくて、何故俺を狙いに来たのだろうか。
宇宙人の上の奴らは何も変わらない現状にいよいよ飽き始めたのか…？
だが、長門が未だに俺を守ってくれるという事からしてまだ穏健派も残っているという事なのだろう。
いや、逆に穏健派が大半を占めているのかも知れない。
ただ一つ言える事は、今俺が何を思い考えようがどうする事も出来ないって事だ。
『ハルヒ、もう一度聞くが、今年も不思議探しを続けるのか？』
ハルヒの表情が電球のスイッチをＯＮにしたかのようにパッと明るくなる。

とんでもない事を言うつもりだな…

解るさ、俺には。

『あったし前よ!!実はね?今日も不思議な事が起こるかな～って期待してたのよ。でも、さっきの女の子と有希と古泉君の様子がおかしいって事くらいしか起こらなかった。』

やっぱり何か起きることを望んでやがったのか…。

はぁ…俺の苦労も知らないで…

『あ、でもね、すっごい事もあったわ。』

ハルヒはニヤニヤして俺を見た。

こっち見るな…

『一体何なんだ?』

『ふふぅん。あんたがあたしを押し倒した事かしら。』

グハァァァァァっ!!!

『あれは訳ありだっ!!無罪だ!!濡れ衣だ!!』

『あたしが警察に届け出たら逮捕ね逮捕。』

『待てって!!逮捕とかまっぴらごめんだぞっ!!』

『ふふっ。じゃあ今年もＳＯＳ団で頑張りなさいっ！』

なんじゃそりゃーっ!!!
ハルヒは困り果てた俺を置いて行くように颯爽と歩き出した。
こいつと一緒にいたら宇宙人に襲われるどころか、現実世界で警察にまでお世話にならなきゃいけないってのかっ!!?
『ちょ、待てよっ！』

お前に出会うまではちゃんと保証されていた俺の輝く青春が…
くそっ…返せよハルヒ!!
俺の青春っ!!

ＳＯＳ団始動

時は始業式。
恐らく今日からまたハルヒに振り回されるであろうが、それも久々の事だからまあよしとしよう。
今日もハルヒお馴染み超不機嫌パワー全開で俺を迎えてくれる事だろうと予想しつつ、教室に足を踏み入れた。
…いたいた。
『よう、元気か？』
俺が机に伏せていたハルヒにいつも通りの挨拶をする。
ゆっくりと顔を上げたかと思うと、鋭い視線を俺に注いだ後、
『別に…』
はいはい不機嫌不機嫌。
正直この顔は見飽きた。

『今日からＳＯＳ団も始動するんだろ？活動内容は決まっているのか？』
俺の質問にハルヒは憮然たる面持ちで答えた。
『まだ決まってないわよ…。不思議な事が一つも転がってやしない。はぁ。』
よし…、今日は電気ストーブのある部室でまったりとお茶会だな。
『まあそう簡単に不思議な事に直面なんてできんだろうしな。』
『そうね。やっぱり自分から探しに行かないとダメなようね…。』
何!?
自分からってどうせ一人では行かないんだろう？
仮にこいつが一人で不思議探しとやらに出向いたとしても、何も発見できない事への怒りのはけ口が見つからずまた閉鎖空間を生み出すんだろうが。
『よし！決めた！今日もＳＯＳ団で不思議探しに行きましょ!!』
ハルヒは突如としてニヤリと笑うと、目に赤い炎をたぎらせて言い放った。
結局こうなるのかよ…
とツッコミを入れつつも、放課後のこのこと部室へと向かった俺である。
とりあえず朝比奈さんの愛らしい小猫のような笑顔と、愛情を込めて煎れてくれるあったかいお茶で心身ともに温まろう…
そう思い俺はドアをノックした。

『どーぞ。』
勇ましい返答が聞こえて来た。
間違いない、ハルヒの声だ…
俺は若干ブルーになりながらも扉を開けた。

『なんだ。ハルヒと長門だけか。』
『何？悪いって言うの？』
ペリカンみたいな口をして呟くハルヒ。
悪くはないんだが、やっぱりあの麗しい瞳の持ち主に癒されたいのだよ、俺は。
そんな事を考えながら、どこぞやの組長を連想させる態度でパイプ椅子にふんぞり反るハルヒを眺めていた俺は、ふいに聞こえたノックの音の方に首を９０度回してから目を凝らした。
部室の扉が開くと同時に入ってきたのは、俺が待ち望んでいた朝比奈さんと…
思わず落書きしたくなるようなハンサムスマイルを浮かべる古泉であった。
『久しぶりね！元気してた!?』
『至って元気ですよ。みなさんもお元気のようで何よりです。』

白すぎる歯。
イライラしてくる…
『みくるちゃん？新しい衣装ゲットしといたからまた着せてあげるわね！』
『まままたですかぁ…？』
ハルヒよ、朝比奈さんが嫌がってるではないか。
しかし、ハルヒを止めたがらない俺がいるのは何故だろう。
朝比奈さん、ごめんなさい。
『ゴホン。で、ハルヒ、今日はどうするんだ？』
『お～っと。そうだったわね！』
おひ…
『今日の授業は午前中で終わりだったからまだ時間は早いでしょ？そこでよ。巷で噂になってる廃トンネルに行こうって訳よ！』
人差し指を天に掲げ、自信に満ち溢れたような笑顔を俺たちに向けながらハルヒは言った。
『ハルヒ、お前はいつからミステリ研究会に入ったんだ？』
『あんなのと一緒にしないで。どうせ部室でグダグダしていても不思議な事はやって来ない。だからこっちから行動しなきゃダメなのよ。』

行動しようがしまいが、いつもグダグダだったろーが。
『そうかい。で、その廃トンネルってのには何が出るんだ？幽霊か？』
『そのトンネルに入ったら何か不思議な事が起こるって噂よ。だから、あたし達でその不思議を確かめに行こうってわけ。』
不思議な事が起こらなかったらどうするつもりなんだ。
『わ、私…そういうの苦手なんですけど…。』
小鹿のような目を潤ませる朝比奈さん。
…待てよ？
何か出た時に「キョン君助けてぇ～」なんて言って抱きついてきたりして…
『朝比奈さん、俺が命を賭けてあなたをお守りします。』
『何バカな事言ってんのよ。…じゃ、行きましょうか。古泉君と有希もいいわよね？』
異論を唱える者などいるはずがなかった。
この部屋にはね。
こうして俺達は噂の廃トンネルへと出発する事になった。

山を下った俺たちは私鉄のローカル線に乗り、廃トンネルへと向かっていた。
『いよいよ次の駅ね。』
ハルヒが期待に満ちた笑みを浮かべて言った時、
『うぅ…』
朝比奈さんが身を縮こまらせて怯え始めた。
俺の出番が早速到来したようだ。
『朝比奈さん、俺に引っ付いていいですよ。』
『キョン君…』
今にも泣きそうな目をしている朝比奈さん。
守ってやりたくなるとはこの事を言うんだな、きっと。
『このバカキョン！降りるわよ！』
ちっ…ハルヒめ…
俺たちが降り立ったこの駅、実を言うと俺は何度か来た事があった。
しかし、不思議な廃トンネルがあるなんてのは初耳だったわけで…
『で、ここからどうするだ？』
『ちょっと待ちなさいよ。…えーっと…、あ、こっちよ。』
ハルヒはパソコンでプリントアウトしたと見られる資料を片手に歩き出した。

『この山道を登って行けば噂の廃トンネルがあるみたいよ！』

そう言うと駅の背後に広がる山を指差した。

山と言っても道路などは補装されているのだが、斜面であることに変わりない。

俺は脳裏で目の前に広がっている山道を強制早朝ハイキングコースと重ね合わせていた。

『…トンネルは山奥にあるのか？余りにも奥だったら帰るぞ。』

『ううん、そんなに奥じゃないらしいわ。』

そんなにって…

こいつの基準は当てにならん。

『やれやれ、じゃあ行きますか…。』

俺の倦怠感丸出しの姿を見て肩をすくめる古泉。

お前を見たらますます力が抜ける…

視界に入ってくんな…

つか、帰りたい…

だが、ここまで来て引き返すわけにはいかない事くらい解っていた。

山道を登り始めて１０分。
『ここじゃない!?』
ハルヒはそう言うと左手に続いているもうひとつの道を指差した。
しかし…
『これは…立入禁止のようですね…。』
そこにはフェンスが立ちはだかり、立入禁止になっていた。
『どうするんだハルヒ。』
『決まってるじゃない。乗り越えるのよ。』
『乗り越えるって言っても朝比奈さんや長門はどうするんだ。』
このフェンス自体はそんなに高くはないが、やはり女の子が乗り越えるには厳しいかと思われた。
ハルヒは除く。
『キョン、肩貸しなさい。』
『肩貸せ…とは?』
『あたしがあんたの肩に乗ってフェンスを乗り越えるのよ!』
お前は自力で乗り越えられるだろうが…。
『仕方ないな…。』

『僕も手伝いましょう。』
こうして俺と古泉を踏み台に女の子達はフェンスを乗り越える事となったのだが…
『ハルヒ、せめて靴は脱げよ。』
『仕方ないわね。じゃあ後で渡してよ。…ちょっと、もう少しかがんでよ。あんたでかいから乗りにくいのよ。』
踏み台になってる俺の身にもなりやがれ。
『準備はいいか?』
俺の肩に乗りフェンスをしっかりと掴むハルヒ。
俺が立ち上がればフェンスを楽に乗り越えられる高さになるはずだ。
『いいわよ。あ、立ち上がった後に上向いたら殺すから。』
こ、殺す!?
…なるほど、そういう事か。
今日は制服だ。
『分かってるって。じゃ、いくぞっ!!』
俺はゆっくりと立ち上がる。
ハルヒの体重は予想以上に軽かった。
この質量であの馬力が出せるのは何故なんだ…?

『どうだ？いけそうか？』
『余裕よ余裕。』
ハルヒがフェンスを跨ごうとしたその瞬間…
今だっ!!
……
『ふふっ。あなたって人は。』
古泉は優雅な顔をして俺を見た。
なんだ古泉、その目は。
そんなこんなで全員フェンスを乗り越える事ができた。
さあ、あとはこの道を行けば目的地のトンネルが現れるってわけだな。
『みんな早く行くわよ!!』
やけに晴れやかな顔を見せたハルヒは、直ぐさま前に向き直りトンネル目指してズカズカと歩き出した。
俺たちはハルヒの背中をひたすらに追い掛けた。

『これがそうね…。』

ついに来てしまったのだ。
噂の廃トンネルに。
何と言えばよいのだろうか…。
とにかく気味が悪い…
『キョン君…、くっついててもいいですか…？』
朝比奈さんは怯えるように俺の服をつまむ。
むしろ抱き着いてもらっても構わないのだが。
『もちろんですよ。』
俺が顔を緩めた瞬間、憎悪に満ちた視線を感じた。
…幽霊か!?
『んぅ―…。』
視線を感じた方に目をやると、まるでおもちゃを取り上げられたかのような目で俺たちを見るハルヒの姿があった。
そんなに嫌か。
俺と朝比奈さんがくっついてるのが。
『行くわよっ!!』
へぃへぃ。

こうして俺達は廃トンネルの中へと足を進めた。

『あんまり広くないんだな。』
『ですが、声があまり響かないのはちょっと気味が悪いですね。』
確かに…。
噂で聞いた事があるが、風呂場などの狭い場所なんかで声が響かない時、そこには霊魂が漂ってるとかいないとか…
『なぁ、長門、ここって幽霊とかいるのか？』
『…わからない。』
何も考えていないような顔で言う。
お前にとっては幽霊なんて目じゃないか。
『長門でも解らないか……ん？…って、何で俺が先頭を歩いてるんだっ!!』
俺は気付かぬうちに先頭を歩かされていたのだ。
幽霊なんてものは信じちゃいないが、やはり先頭ってのはいい気がしない。
『いいじゃない。男でしょ！』
『古泉はどうなるんだよっ！』

『僕は女ですよ。』
『嘘をつけ噂を!!』
全く…
俺が神隠しにあったら責任取れよ…

どれくらい歩いただろうか…
気がつけば外からの光がトンネル内に届かなくなってた。
いや、トンネルに広がる漆黒の世界が光を遮断しているといった方がいいのかもしれない。
『なんなのよ、不思議な事なんて何も起きないじゃない!』
と強気に言ってるハルヒだが、俺の後ろにいるのはぴったりとくっついているのは何故だ?
そして朝比奈さんも…
『このトンネル、ど、どこまで続いてるんですかぁ!?』
言われてみればそうだ。
普通のトンネルにしては長すぎる。

『まあそのうち出口が見えてくるでしょ。』
本当か…？
何だか嫌な予感がしてきたぞ…
俺がふいに後ろを振り返る。
…なっ!?
自分の目を疑った。
俺達が入って来たトンネルの入口がない、つまり外が見えないのだ。
普通なら少なからず日光が差し込んでいるはずなのだが、トンネルの入口、そして出口の方も闇で封鎖されていた。
『ちょっと待て!!入口がっ!!』
俺が動揺を隠せないでいると、こんな状況にも関わらず古泉は爽やかな声で、
『これは異常事態ですね。最初、入口からトンネル内を見た時、出口は見えてました。つまり、こんなに長いトンネルではなかったという事になりますね。』
『外がもう暗いとかじゃないのか？』
『いえ、時間はまだ早いですし、外が暗いからという訳ではないようです。それに出口にはいつまで経っても近付いていない…、と言うより近付けない…、これは明らかにおかしいです。』

不思議な現象を自己満足のようにグチグチと解説し終えた古泉は、やれやれと言った様子で肩を竦めて見せた。

どうすんだよハルヒ…、これもお前の望みか…？

『じゃああたし達出られないって事？』

白々しいぞこの野郎…

『その可能性はなくもないですね。』

古泉はもういいっ。

だがこの時、不思議な現象は更に起きようとしていたのだ…

長門がいない…

無論、初めからいなかったわけではない。

大気中の窒素のように存在感が希薄な彼女だが、さっきまでちゃんとそこにいたのだ。

『長門!?どこ行った!?』

『さ、さっきまで私の後ろにいましたよぉ…!?長門さん…。』

細い肩をすくませながら呟く朝比奈さん。

ここまで来るとハルヒの望みではない事は確かだ…

『古泉、何かいい考えはないのか？』

『そうですね…。とりあえず出口の方向に歩いてみましょうか。』

俺たちは辿り着けるかすらわからない出口を目指し歩き出したのだが…

『古泉、出口なんてないじゃねーか…。』

予想は的中した。

いくら歩いても出口には辿り着けないのだ。

『ちょっと待って…、みくるちゃん…いないんだけど…』

ハルヒは足を止めると信じられないといった様子で呟いた。

またそんな冗談を…と思いつつも俺は辺りを見回すが、ハルヒの言った通り朝比奈さんの姿はどこにも見当たらない。

『嘘だろ…？古泉は!?』

……返事がない。

さっきまでそこにいたはずなのに。

『古泉君まで消えちゃった…!?』

落ち着け、落ち着け…俺…

『キョン…、向こうから何か来るみたい…。』

俺が思考をフル回転させていた時、ハルヒは怯えたように俺の腕にしがみつきながら目の前に広がる闇を見つめた。

『何が来るんだ!?』

『わかんない…』

『逃げるか!?』

『うん…』

俺達は正体のわからない「何か」から逃げるべく後ろを振り返る。

しかし、またもや目を疑う光景が広がっていたのだ。

『冗談だろ!?』

なんと俺達が来た道は行き止まりと化していたのだ…

『キョン、来る…。』

何が来るって言うんだよ…?

ハルヒは何か得体の知れない物に怯えてるし、俺はびびって足が動かねぇし…

どうする…?

……

くそっ…夢なら…
『夢なら覚めろよっ!!!』
俺が叫んだ瞬間だった。
『くっ…』
俺は突如激しい目眩に襲われ、どうする事もできずにただ意識を手放した。

ここは…外か…?
俺は意識が朦朧としている中、体を起こした。
『よかった…、気が付いたんですね?』
優しい口調で俺に問い掛けるこの声が朝比奈さんだと判断するまでそう時間はかからなかった。
俺はぼやけている目を擦りつつ一番気になっていた事を尋ねてみる事にした。
『俺、生きてますか…?』
『はい。ちゃんと生きてますよ。』
俺は「生きている」という言葉に胸を撫で下ろしてから辺りを見回した。

あっ…

『古泉！長門！生きてたのか!!』

そこにはいつものように爽やかスマイルを振り撒く古泉と、屋外にも関わらずハードカバーを読んでいる長門の姿があった。

『もちろんですよ。』

前髪を指で弾きながら言う古泉。

何なんだ、その余裕顔は…

『はぁ…。いきなり消えるからびびったんだぞ…。…あっ、ハルヒは!?』

『涼宮さんならそちらで気を失ってますよ。』

古泉が指差した先にはハルヒが倒れていた。

死んでないよな…?

『おいっ!!ハルヒ!!』

俺はハルヒの体を揺する。

『う…』

『ハルヒ、大丈夫か?』

『キョン…?あたし達…助かったの?』

『そうみたいだ。』

『ここどこ…？』
どこって…
ん？
ここはトンネルの入口じゃないか…
『なんだかよくわからんがトンネルの外に出て来れたみたいだ。』
『よかった。死ぬかと思ったわ…。』
ハルヒはそう言うと体を起こし、長門や古泉、朝比奈さんがいた事に気付く。
『あっ！みんな無事だったのね!?』
これで無事じゃなかったらどうなってたんだ…？
なんて考えつつもとりあえず胸を撫で下ろす。
『古泉も長門も朝比奈さんも気がついたらここに来ていた、という事なのか？』
『まあそんな感じですね。』
適当に答える古泉。
お前が何事にも動じないのは神人と戦ってるからか…？
本当に不思議な事が起きるなんて予想もしていなかった。
未だに状況が把握できずにいたが、ここであれこれ考えていてもらちが開かない。
俺たちは恐怖の廃トンネルを後にする事にした。

『キョン君、ちょっとお話があります。』
古泉が爽やかな笑顔で俺に声を掛けて来たのは、駅に到着して間もなくの事だった。
『いきなりなんだ。また閉鎖空間の事か？』
『いえ、違います。とりあえずトイレでお話しましょう。』
なんだが知らんが、俺だけを呼び出すという時点で、何か重要な事なのだろう。
俺は渋々了承した。
『ハルヒ、ちょっとトイレ行って来る。』
『早く帰って来なさいよ。電車来たら置いて帰るから。』
こうしてトイレで古泉と2人きりになった。
なんか嫌だな…
『で、話って何だ。』
『今日の事ですよ。』
トンネルの事か…？
『それがどうかしたか？』
『あのトンネルで何が起こりましたか？』

こいつ頭がいかれたんじゃ…？
いや、元々か。
『お前もいただろうが…。まあ、不思議な事が起きた、とでも言っておこうか。』
『巷で噂になっている不思議な事が起きる廃トンネル…。実際にそのトンネルへ潜入して、僕たちは見事、不思議な事に直面した。これついてはどう感じましたか？』
『そうだな…、ちょっとタイミングがよすぎるんじゃないかとは思ったな。』
『その通り。噂になっているトンネルと言えそんな都合よく不思議な現象は起こりません』
そうだろうな。
『じゃあいつぞやの孤島の時みたいに
お前が用意したエンターテイメントだったってことか？』
『御名答。』
おいおい…
またハルヒの機嫌取りだったってことかよ…
『長門か…。』
『はい。僕が長門さんに提案しました。朝比奈さんにはあなたと涼宮さんがトンネルに閉じ込められていた間に事情を説明しておきました。』

何で俺には秘密なんだよ…

『じゃああれか。ハルヒが怯えていた得体のしれないやつも長門が作り出したのか。』

『何の事でしょうか。心辺りがありません。』

古泉の目は嘘をついている様には見えなかった。

…

じゃあ〝あれ〟は一体何だったんだ…？

『…分かったよ。この事はハルヒに内緒にしておけばいいんだな？』

涼やかな笑顔で頷く古泉。

全く、長門といい古泉といい…

俺は呆れながらトイレを出た。

『電車来たわよ!!』

置いて行くんじゃなかったのか。

『お、おぅ！』

こうして俺達ＳＯＳ団の今学期初の活動は、ハルヒが真実を知らないという結果で幕を閉じた。

まあ俺自身も最後の最後まで真実を知らされてなかったのだが…、ハルヒはともかく俺には最初の段階で教えてくれたっていいのに…

油断したら命を落としかねん。

何がＳＯＳだ。

俺、この団辞めよっかな…

涼宮キョンの憂鬱（前編）

『よっ、キョン。』
　後ろから肩を叩かれた俺はそちらに振り返る。
『何だ、谷口か。』
『何だとは何だ。お前、涼宮の毒に侵されてるどころか、もう涼宮になってるんじゃね～のか？』
　全くこいつは…。
『何馬鹿な事言ってるんだ。お前こそ国木田になってるんじゃないのか？』
『何で国木田なんだよっ!!意味わからねぇ。』
『ぷっ…。お前が国木田とか…笑えねぇ。』
『だから、意味わかんねぇって!!』
　あの廃トンネル調査から数日が経ったある朝、俺は谷口とたわいのない話で笑い合いながら登校していた。

無論、あれ以来不思議な出来事は何一つ起こっていない訳で、ハルヒも相当退屈しているだろう。

『よう、ハルヒ。元気か？』

俺は自分の席にどっかりと腰を降ろすと、後ろの席に座っているやつに声を掛けた。

『普通。あんたはどうなの？』

『至って普通だな。』

さあ、ここからが問題だ。

ハルヒがまたエジソン並の発想力で新たなるＳＯＳ団の活動内容を閃くか否かで、今日の放課後のまったりお茶会が開催されるかどうかが決まるのだ。

うむ、是非とも閃かないで欲しいものだ。

お茶会いいよお茶会。

とか言っててもどうせ閃くんだろうな…、ハルヒの事だから…

だが、俺の予想とは裏腹に今日のハルヒは割合静かだった。

体調でも悪いのか、机に伏せている時間の方が長かったように感じられた。

昼休みか…。

『ハルヒ、飯食わないのか？』
『食べない。』
変なやつだな。
もしやまた閉鎖空間なんか生み出そうとしているのか？
それだけは御免だぜ。

そうこうしている内に時は流れ、既に放課後である。
『ハルヒ、今日は何か変だったぞ？どうしたんだ？胃もたれか？胸やけか？』
『そんな歳じゃないわよ。まあ体調不良とでも言っておこうかしら。』
何じゃそりゃ。
そんなこんなで俺達は部室へと向かった。

部室に到着した俺はドアをノックをする。
…返事はない。

『何だ、誰もいないのか。』
そう言っておもむろにドアを開くと、誰もいないと思っていた俺は不意をつかれた。
長門がいたのだ。
いるかいないかわからんなぁ…全く。
『よっ、長門。』
『……。』
また分厚い本を読んでいるな。…料理…大全集…？
『それ、おもしろいか？』
『……うん。』
『そうか。』
ハルヒは部室に入るや否や、パソコンの電源を入れ、椅子に腰掛けた。
『ハルヒ、何するんだ？』
『パソコンで不思議な事探すのよ。あんたも何か不思議情報とか知らない？』
俺は情報屋か。
そんなもん知ってたらとっくにハルヒに言って……、いや、たぶん言わないだろうな。
『知らんなぁ。そういう事は古泉に聞いてくれ。』
『何で古泉君なのよ。』

何でって言われても…と少し困っていたその時、軽いノックの後、部室のドアが開かれた。
『こんにちは。』
なんだ、古泉かよ…
『古泉。』
俺はオセロ盤を指差し、古泉に目線を送る。
ニッコリと頷く古泉。
こいつがいると暇潰しくらいにはなるか、という事で適当にオセロを楽しんだ。
『はい、お茶ですよ。』『ありがとうございます。』
俺は煎れたての煎茶をゆっくりと啜った。
やはり朝比奈さんの煎れてくれるお茶はうまい。
『みくるちゃん、新しい衣装持って来たから着なさい。』
『え、えぇ…?今日は何の衣装なんですかぁ…?』
『スク水。』
ふがっ!!!!
俺はハルヒの予想だにしない言葉に思わずむせ返る。
『ゴホッ!ゴホッ!…お、おいハルヒ、それはまずいだろっ!?』

『冗談よ。』
おひ…、ハルヒめ…。
この季節にスク水なんて鬼畜以外の何でもないぞ…
…夏なら許す。異論は認める。
そして、時間だけがダラダラと過ぎていき…
『今日はもう帰る。』
不機嫌そうに言うとハルヒは席を立った。
結局今日もダラダラして終了か…。
まぁ、古泉にオセロで１０連勝したからいいか。
『じゃあ俺も帰るかな。』
『キョン君、勝ち逃げですか?』
勝ち逃げって…
『また明日勝負してやっから。な?』
『わかりました。では、お気をつけて。朝比奈さん、オセロしませんか?』
朝比奈さんを狩るつもりか…
こうして俺とハルヒはオセロ競技部を抜け出し、一足先に帰る事にした。

空が厚い雲に覆われ始めた中、俺達はあまり会話もないまま帰路についていた。
それにしても、今日のハルヒはどこかおかしい。
『ハルヒ、今日はどうしたんだ?』
『あんたに言ってもわからないわよ。しかもそんなに対した事じゃないしね。気分が上がらないだけ。』
本当かよ…
その時、一滴の雫が俺の鼻の先を濡らした。
『あ、降ってきやがったな…。』
交差点に差し掛かった所で突如降り出した雨に見舞われた俺達は、角にあった薬局のテントで雨宿りをする事にした。
それにしてもすごい雨だ。
雷も怒ったようにゴロゴロと鳴り始めた。
『もう…何なのよこの雨。天気予報じゃ晴れのち曇りだったじゃない。』
『天気予報もあてにならないって事みたいだな。そのうち止むだろ。』
しかし、俺の予想とは裏腹に雨はなかなか止まなかった。

それどころかきつくなっているような気さえする。

『疲れた。』

ハルヒはそう言うとその場にストンとしゃがみ込んだ。

無理もない。

雨宿りを始めてからかれこれ1時間は経ったであろう。

ずっと立ちっぱなしってのは流石にキツイ…

『ハルヒ、帰るか？』

疲れきったハルヒを見兼ねた俺は、大雨の中を特攻隊の如く突っ走って帰ろうと提案したのだ。

ハルヒは目をつぶりながら、

『そうしましょ。』

と、どうでもいいように答えた。

しかし、この判断が後々大変な事態を招くなんて事は、俺達には知るよしもなかった。

『いいか、青信号が点滅しだしたら全力で渡るんだぞ。』

俺達は作戦会議をしていた。

もっとも、そんなに対した会議でもない訳だが、いかに濡れずに薬局から対角の地点にたどり着けるかをハルヒに説明しているのだ。

『青信号が点滅してる時に渡って、そして次の信号もすぐに青に変わるから、待たなくてもいいって訳ね。』

『その通りだ。そこの信号が青になった瞬間に全力ダッシュだからな。』

『わかったわ。』

しかし、この交差点は割と大きいし、無論交通量も多い。

交通事故だけは避けたい……所だったのだが…

『行くぞ!!』

俺達は青信号が点滅しだしたのを確認すると全力で走り出した。

普段ならこんな馬鹿みたいな事は考えもしないが、疲労とは恐ろしいものだ。

俺達の思考を少し鈍らせる。

『冷めてーっ!!!』
『雨キツすぎじゃないこれっ!!?』
なんて叫びながら無事一つ目の横断歩道を渡り切り、作戦通り二つ目の横断歩道も青になっているのを確認し、渡り始めた…
が次の瞬間、トラックが物凄い勢いで俺達目掛けて突っ込んで来たのだ。
まずいっ!!
無駄だって事くらい分かっていたが、俺はとっさにハルヒをかばった。
大きな衝突音と共に、俺達は吹き飛ばされたようだ。
だが、何だ？
一瞬光ったような…
俺は飛ばされている最中にも関わらずそんな事をふと考えた後、意識を手放した。

何だ…騒がしいな…
『…るみたいだ!!』

『…ぐ病院へ搬送しろ!!』
病院へ搬送？
…待てよ…、俺…何してたんだっけ…？
…そうだ…。
俺はトラックにはねられて…
『意識があるようだ!!』
俺…生きてる…？
俺は朦朧とした意識の中で目を開けた。
『大丈夫か!?絶対助けるから、頑張るんだぞ!?』
救急隊員か…
俺は試しに体を起こしてみる。
『おいおい、動いちゃいかんよ!』
…あまり痛みはない…。何故だ？
トラックにはねられたはずなのに体が動く…
『…大丈夫です。』
声も出る。
『おぉ、意識はしっかりしてるみたいだな!』

救急隊員が少しばかり安堵の声を漏らす中
俺自身も生きてる事を再確認できて胸をなで下ろした。
これで死んでたりでもしたら、本当に笑えない。
よかったよかった。
…よかった…か？
何か忘れて…
…!!?
ハルヒは!!?
『俺のそばにいた子は!?』
恐らくこの時の俺の表情を後々ＶＴＲで見たら笑えるだろう。
それくらい物凄い剣幕だったはずだ。
『…俺のそばにいた子…？あぁー。そっちでまだ意識を失ってるみたいだ。絶対助ける
から心配するなよ。なんだい？あの人は彼氏か何かかい？』
彼氏て…大丈夫かこのおじさん…
『いえ…そういう訳じゃ…』
『そうか。でも大切な人には変わりないようだな。』
まあ確かに大切ではあるが…

『おぃ!!意識があるみたいだ!!』
後ろの方で別の救急隊員が声を張り上げる。
ハルヒも無事だったようだ。
俺は駆け寄るべく立ち上がろうとする。
『こら!これから搬送するから安静にしとかないとダメだ!
彼氏さんもちゃんと助けるから!』
だからさっきから彼氏って何を言ってるんだこの人は…。
俺は隊員の言葉を無視して立ち上がる。
『よいしょっと…』
意外にも楽に立ち上がる事が出来た。
という事は、特に大きな外傷はないという事だろうか。
…待てよ…?
…おかしい。
…何かがおかしい。
俺の体じゃないみたいだ。
俺はふと足元に目をやった。
…これは…

ハイソックス!?
そしてスカートだと!?
俺はいつからコスプレ好きになったんだ!?
だが、次の瞬間俺は全てを悟った。
女になっている…と。

頭の中がぐるぐる回る。
考えても考えてもわからない事だらけだ。
俺は何となしにポケットに手をつっこんだ。
携帯…?
ポケットから出てきたのは見覚えのある携帯電話だった。
これは確か……
ハルヒの携帯……!?
待て待て待ていっ!!
俺は女になっていて、ポケットからはハルヒの携帯が出てきたって事は…

俺は直ぐさま着ている服を確認した。
結果は言うまでもない。北高、つまり俺達の学校のものだ。
さらに俺は髪を触る。
俺はあるものを掴み取った。
勿論、黄色いリボンである。
間違いない…
疑いは確信へと変わった…
俺はハルヒになっている…
そう確信した瞬間、俺は自分の体、つまりキョンがどうなっているのかが気になった。
まあ予想はできたが…
『何よこれっ!!』
後ろから男の叫び声が聞こえて来た。
台詞は一歩間違えれば警察行きのものだったが…、それは気にしないでおこう。
『おいハルヒ!!』
俺はハルヒ…いや、キョンを呼んだ。
『あ、あたし!?まさか…』
ハルヒは驚きを見せると同時に全てを悟ったのか、言葉を失っていた。

『ああ。そのまさかだ。』
俺達は雨が降り続く中お互いの姿を眺め合ったのち、歩み寄る。
『君達！動いちゃだめだ!!すぐに病院に搬送するから座ってなさい!!』
声を荒げて俺たちを静止しようとする救急隊員。
『あ、ホント全然大丈夫なんで。今日はもう帰りますね』
真剣な隊員をよそに俺は余裕の素振りを見せてこの場から離脱する機会をうかがう。
正直、全然大丈夫じゃなかったが、このまま病院なんかに搬送されたらめんどうな事になるからな。
『そういうわけにはいかない！こういう事故は今大丈夫でも後になって
重篤な症状が出ることがあるから絶対に病院に行かなきゃいけないんだ！』
怒気を強めて説得してくる。
これはらちがあかないやつだ。
『ハルヒ！行くぞ!!』
『えっ？』
俺はハルヒ（キョン）の手を取り走り出した。
体は痛かったが走れるくらいなので大丈夫だろう。
何かあったらハルヒか長門がなんとかしてくれるさ。

そんなことを自分に言い聞かせながら
追いかけてくるおじさん隊員達を見事に巻くことに成功し
俺たちはそのまま帰宅することができた。

『はぁ…。』
今起きている事を、現実として受け止めねばならないと思うと…
俺は溜息を一つ漏らした。
『…何でこんな事になるのよ…。しかも結局ずぶ濡れじゃない。』
確かに…。
上から下まで川に飛び込んだみたいに水浸しだ。
『これからどうするんだ?』
俺はダウンジャケットにたっぷりと染み込んだ雨水を絞りながらハルヒに問う。
『こっちが聞きたいわよ。』
そりゃごもっともだ。
『俺達…入れ変わっちまったんだよな…?』

『もう…最悪…。』

はたして俺の体が最悪なのか、俺がハルヒになってしまった事が最悪なのか…。

出来れば後者がいいな…

なんて考えながら、気付けばいつも別れる場所まで来ていた。

『キョン、服脱がないでよ。』

しかめっ面で俺を見る。

また無理難題を…

『じゃあどうすんだよ。つか、それならお前も脱ぐなよ。』

『あぁー。本当どうすればいいのかしら…。』

無視かよっ。

『俺、ハルヒの家へ帰るのか…？うまくやり過ごす自信が全くもってないんだが…。』

『あたしもないわよ…。大体あんたの家がどこにあるのかすら知らないんだから…。』

困った、本当に困った。

八方塞がりとはこの事を言うのか…

時刻は既に8時を回っていた。

どうするか悩みに悩んで１０分。
『そうだ!!』
俺は天才的な事を思いついてしまった。
まあ、そこまでだが。
『うわっ、びっくりさせないでよ。』
『いい所があった！今日はそこに泊まろう！』
『どこなのよ!?』
俺はふんと鼻で笑い、人差し指を真上に突き上げて宣言した。
『長門の家にお泊りするわよっ!!』
フッ、決まった。
ハルヒになりきってやったぜ。
『やれやれ。』
お前もか。
こうして俺達は寒さで凍えそうになりながらも、急ぎ足で長門の家へと向かった。

『いきなり押しかけちゃって大丈夫なのかしら。』
少し申し訳なさそうな顔して言うハルヒ。
お前はいつもいきなりだろうが。
『大丈夫。事情を説明したら何とかなるさ。』
俺は迷う事なくインターホンのボタンを押す。
返事はない。
……
まさか…
『留守かしら…。有希の事だからまだ部室で本読んでたりなんかしてね。』
『そんなはずないだろ…。』
とその時、近くにあるエレベーターが動き出し、誰かが上がってくるようだった。
そして、俺達のいる階で止まり、大きな機械音を廊下に響かせながら扉を開けた。
中から現れたのは、期待を裏切らない長門であった。
本当に頼りになるな…
『有希!!あんたどこ行ってたのよ～!!まさか部室でずっと本読んでたりしてた?』
『……発狂?』

待て待て待て待て!!!
勝手に俺を発狂した事にしないでくれっ!!!
『ハルヒ、長門は何も知らないんだからそんな喋り方したら変に思われるだろうが。』
『あ、そっか。』
ハルヒはそう言うと自らの頭をコツッと叩く。
気持ち悪いったらありゃしない…
『長門、これには色々と事情があってだな…』
『…入って。』
俺の言葉を遮り部屋に案内してくれる長門。
俺達が水浸しで凍えていたのを察してくれたのだろうか。
なんて気の利く奴なんだ…
ハルヒがこうであれば言う事なしなんだがな。
『お邪魔します。へー、ここが有希の家なんだ。お母さんとかは?』
『…いない。』
『…見たら分かるわよ。仕事とか何か?』
首を縦に振る。
ここはうまくやり過ごしたようだ。

つか、初めて長門の家に来たやつはみんなこの会話をするんだな。
『…お風呂入る？』
『なっ!!?』
唐突の長門の提案に思わず変な声が出てしまった。
『入りたいのも山々なんだが…』
『…？』
俺は今日の出来事を詳しく説明した。

『…そう。』
どうでもいいかのような返事をした長門に俺は小声で問う。
『…これもそういう系絡みなのか？』
『…絡んでいない。』
ハルヒの望みでも宇宙人の仕業でもないってのか…
『…お風呂入る？』
だから…
『キョン、入っていいわよ。』

んなぁっ!!?

『は…入っていいのか?』

『だって風邪引いちゃうでしょ?それにあたしの体なんだから大切に扱ってもらわないとね。』

そりゃもう大切に扱わせていただきますけども……。

『ただし…、目隠しして入りなさい!』

なにー!?

まあ、このまま冷たい体で凍えるよりマシか…

俺はハルヒ同行のもと、脱衣所へと向かった。

『うわっ!見えねぇっ』

『当たり前でしょ!見えないようにしてるんだから。』

『痛たたた!きつく縛り過ぎだっ!め、目が潰れる〜っ』

『じっとしてなさいっ!』

みなさんご存知かと思いますが、現在私達の体は入れ代わっております。

上記の光景は法律に違反しておりますが、通報しないで頂きたい。
…って
『そんなにぐるぐるに巻かなくてもいいだろっ！』
俺の目にはタオルが2枚分ぐるぐると巻かれていた。
無論、しっかりと縛ってあるので外れる事もない……はずだ。
『これでよしっと。あ、一つ言い忘れてたけど、シャワー浴びるだけだからね!!』
『分かったって…。』
こうして俺はようやく入浴の許可を得た。
俺はソックス、カーディガン、シャツ、スカートの順に脱いでいき、ついには全て脱ぐ事に成功した。
あぁ…精神が擦り減る…
俺は手探りでドアを探し、ふらふらとした足取りで暖かい風呂場に飛び込んだ。

俺は温かいお湯が並々と入っている湯舟に浸かりながら今日の事を考えていた。
これからどうするのか、どうすれば元に戻れるのか、考えても答えは一向に見えてこ

ない。
　一番の疑念は、何故俺達はトラックにはねられただけで体が入れ代わってしまったのかという事だ。
　普通ならはねられたのなら、怪我をするだけのはずだが…ますますわからん…
『あ～』
　本当に入れ代わったのか…
　声がハルヒそのものだ。
『キョン…』
　ぷっ
『S・O・S団よ!!!』
　懐かしいな…
『何真似してるのよ!あたしも寒いんだから、そんな事してるんだったら早く出て来なさいっ!』
　俺の声が余程大きかったのか、ハルヒが脱衣所から注意してきやがった…
『分かったよ。』
　俺は仕方なく髪だけを洗い、急ぎ気味に風呂場を出た。
『ふ～、いい湯だったな～。』

『やっと出て来たわね。あたしも入ろっと。』
『なあ、お前は目隠ししないのか？』
『目隠しして欲しい？』
　こいつ…
『いや、お前がいいなら俺は別に…。』
『う～ん…、じゃあ…目隠ししようかな。』
　少し躊躇った後ハルヒは目隠しＯＮを選択した。
　若干ありがたいと思ったが、どこかやるせなかったのは何故だろう…
『あ、変な事しないから大丈夫よ…。』
『分かった分かった。』
　俺が了承するや否や、ハルヒはタオルで目隠しをしてから服を脱ぎ、風呂場へと入って行った。
　と、ここで問題が浮上した。
　着替え…あるのか…？
　俺は手探りで着替えを探していた。
　すると…
『…着替え。』

姿は見えないがどうやら長門が着替えを持って来てくれたようだ。
…って、ちょっと待てよ…？
こんな事態は長門でも想定外だっただろうから、新しく着替えを用意していたとは考えがたい。
って事は…長門が一度身に着けたものって事か…!?
思わず顔がにやけて…い、いかんいかん。
俺はすぐさま表情を戻した。
『お、ありがとう。』
『…いい。』
長門はそう言うとスタスタとリビングの方へ行ってしまった。
さて、着替えるか…

目隠しした状態で巧みに着替えを済ました俺は、目隠し用のタオルを取り鏡に映った自分を眺めた。
そこにはオレンジ色のパジャマを着たかわいい女の子の姿があった。

無論、ハルヒなのだが。
俺は鏡としばらくにらめっこした後、長門がいるであろうリビングへと向かった。
『いい湯だったぜ。長門、本当に色々ありがとうな。』
『…気にしないで。』
長門はそう言い終えると読んでいた本をパタンと閉じ、俺を見つめて一言呟いた。
『…どう?』
どう…?
俺は予想外の質問に戸惑ったが、それ以上に長門の質問の意味が理解出来なかった。
『どう…とは?』
『…入れ変わった事。』
あぁ、感想を聞いてるのね…
『もう訳がわからん。それに俺がハルヒだなんて…』
『…そう。これはよい観察対象。』
観察対象って…
しかも一瞬笑ったのは気のせいか?
『…乾燥機にあなたの下着がある。涼宮ハルヒにこのパジャマと一緒に渡して。』
そう言うと長門は俺に水色のパジャマを手渡した。

俺の色違いか。
持って行ってやるとしよう。
『ハルヒ、着替えだ。あと…これだな。』
『あ…、ありがとう…。』
やはり着替えがない事に戸惑っていたみたいだ。
『着替えたらリビングに来いよ。』
『分かったわ。』
こうしてリビングに戻った俺は、ハードカバーを読む長門をじっくりと観察していた。
そして、しばらくすると随分とでかくなったハルヒ（?）もやって来た。
さて、ここからが本題だ。

『さて…』
俺達はリビング中央に置かれた大きなテーブル（こたつ付き）を囲み、今日の不可解な出来事について検証していた。

『何で入れ変わっちまったのか…だな。まず、俺達はトラックにはねられた。しかし、それだけで体が入れ代わるなんてまず有り得ない。』
『確かにそうよね…。でもあたし、トラックにはねられる瞬間に何か光ったような気がしたのよ。何か光ったって言うよりは…光に包まれたって感じかしら…。』
光に包まれる…？
そういえば…
『俺もあの瞬間、周りが一瞬光ったような気がした。』
『本当？あんたすぐ気絶したんじゃないの？』
『失礼な。俺も見たさ。』
『じゃああの時光ったのはあたしの勘違いじゃないようね。それにしても何だったのかしら…。』
『…雷。』
俺達の会話を聞き兼ねたのか、長門が空気のような声を漏らした。
しかし、この一言は話を一気に解決へと導いた。
『確かに。あの大雨が降る中、光ると言ったら雷位しか思いつかん。だが、音が聞こえなかったな。』
『そうね。どうなの有希？』

『…トラックにはねられたショック、衝撃で一時的に聴覚に異常をもたらした、もしくは衝突音で掻き消されたとしか考えられない。』

うむ…やっぱそうか。

今日の長門の解説は理解しやすかったぞ。

『って事は、トラックにはねられた瞬間、あたし達は雷に打たれたって事？』

『そうみたいだな。何かのアニメみたいな展開だが、そのような状況であれば体が入れ変わるなんて事も起きなくもなさそうな気もしない。』

『どっちなのよ…。』

ハルヒの冷たい視線をマトリックスの如くさらりとかわすと、俺は話を続けた。

『って事はだ。元に戻るにはまたそのような状況に遭遇しなければならないって訳だな？』

『…そう。』

『じゃあまたトラックにはねられなきゃいけないの？しかもその時にタイミングよく雷が落ちるなんて考えられないわよ…？』

ハルヒは困惑の色を隠せないでいた。

『…大丈夫。必ず戻れる。』

何を根拠に言ってるんだ…長門は…

俺は疑問に思ったが、今は長門を信じるしか術がない事くらい分かっていた。

『あっ…』

重苦しい空気の会議も終了し、長門が風呂場へ行った後で思い立ったように声を上げるハルヒ。

『どうした？』

『家に連絡しなきゃ…。今日は家に帰らないでしょ？』

『…確かに家には帰らないが…』

『何考えてんのよバカ…。』

俺の心を超能力者かと勘違いするほどの洞察力で読み取ったハルヒは、テーブルの上に置かれた携帯に手を伸ばした。

『ねえキョン、あたし達…元に戻れるわよね…？』

『お前が望めばな…。』

『何よそれ。』

この場が静まり返ったのは俺の意味不明な返答のせいなのか…、リビングには携帯の

ボタンを押す音だけが響いていた。

俺も家に連絡しておくか…

こうして俺は”今日は友達の家でお泊り会だから”などと超怪しげなメールを母に送りつけたのだった。

その後、魂が抜けたかの様にボーっとしていた俺は突如やって来た睡魔に襲われた。

本当に戻れるのだろうか…

涼宮キョンの憂鬱（後編）

『起きなさいっ!!』
…なんだ…?
『早く起きないと遅刻するわよ!!』
…遅刻だと…!?
『ヤバイっ!遅刻する!……って…今日は学校休むんじゃないのか?』
俺は眠たい目を擦りながら体を起こす。
窓からは太陽の光が差し込んで、俺の前に立っているハルヒ（今はキョンか…）に後光が差している様に見えた。
やはり夢ではないようだ…
『行くの。なんか楽しそうじゃない。』
おいおい…昨日と話が違うじゃねーか…。
あのテンションだだ下がりのハルヒは何処へいった?

だが、ハルヒ一人だけを学校に行かせようものなら俺は1日で超有名人、もしくは変態扱い、最終的には警察行きなんて事になりかねん…。

理由は言うまでもないだろう。

『分かった。俺も行く。』

『決まりね！じゃあ早く用意しなさいっ』

俺は用意と聞いて何をすればいいのかよく分からなかったが、とりあえず立ち上がった。

しかし…

『う…、なんか体がだるいな…。風邪でもひいたかな…？』

『こたつなんかで寝てるからでしょ。』

起こしてくれよ…

俺はだるい体に鞭打ち、ハルヒの指示の元学校へ行く支度を始めた。

そして…

『なんか変な感じだな…。』

『仕方ないでしょ。あんた自分で髪セットできないんだから。』

俺の髪（無論ハルヒの髪だが）をハルヒがセットしてくれている。

鏡に映るその光景はどこかおもしろかった。

『キョン、あたしのリボンは？』
『ん？あ～、そこに置いておいた。』
『これつけなきゃ話にならないからね。』
つけたらどんな話になるんだよ…。
また奇想天外大冒険物語か？
『あ、リクエストある？』
『はぁ？リクエスト？』
『そ。髪型は色々アレンジ出来るから。あんたの好きなのにしてあげるわ。』
『そうだな……じゃあポニーテールで。』
『ほ、本当に好きなのね…。』
俺のストレートな回答に戸惑いを隠せないハルヒが少しかわいく思えた。
無論俺なんだが…
ん？気持ち悪いって？
…ハ、ハルヒだったらの話な訳で、別にＢＬでもなんでもないんだからねっ!!
ついでに言っとくけどツンデ（ｒｙ
こうしてドタバタしつつも学校へ行く準備は整った。
今日は珍しく３人での登校になりそうだ。

長門のマンションを出てから程なくして、歩きながらの作戦会議が行われた。
『いいか、絶対に〝あたし〟とか言うんじゃないぞ。〝～わよ〟とかもダメだからなっ!!』
『わかってるわよ。あたしを誰だと思ってんのよ。しくじるはずがないじゃな……ないだろ。』
初っ端からしくじり倒しじゃねぇか…
『じゃあキョン、あんたも女の子らしく喋りなさいよ。』
『えぇ。そんなの余裕よ余裕。恐らくあたしだったら、外身も中身も完璧なハルヒになれると思うわ。』
『何よそれ。…何だよそれ。あ～、めんどくさいわね…めんどくせぇっ!!』
こうして俺達は傍から見たら変人に思われかねないような怪しい会話を繰り広げつつも、なんとか学校に辿り着く事ができた。
『じゃあ、長門、また部室でな。』
『…うん。頑張って。』

長門のエールを受けて、なんとも言えない気分になった俺は、呼吸を整えてから教室へと足を踏み入れた。
『よっ！キョン。』
谷口がハルヒの肩をポンと叩きいつも通りの挨拶をする。
『何なのよあんたっ！』
ノォーーーーーっ!!!
『なんだ…？気持ち悪い。お前もついに目覚めちまったか？そんな事より、何だ？今日は涼宮と一緒に登校か？ついにそんな仲になっちまったのか～。』
話をややこしくするなっ!!
つか谷口、俺に喋りかけるなっ!!
今そこに立っている俺はハルヒなんだっ!!
『冗談だよ。涼宮？下駄箱で一緒になっただけだ。』
何という完璧なまでのフォロー!!
つか演技うまいな…
『びっくりさせんなよな…。あ、そうそう。今日の体育のソフトボール絶対勝とうな。』
たたたたた体育!?
『ソフトボール？お、おう。頑張ろうぜ。』

そういや今体育はソフトボールだったな…。
『やべっ、先生来た。』
そう言うとそそくさと自分の席へ戻る谷口。
俺は体育の事をあれこれと妄想しながら自分の席に…っておい。
『あんた前でしょ。』
『あ、そうだったな。』
席を間違えるな席を。
どんだけ入れ変わった事を軽く、そして自然に受け止めてるんだこいつは…
俺は自分の席につき、教壇に立っているお喋りマシーンの攻撃を脳内で完璧にシャットアウトした所で、体育についての妄想を再開した。

妄想を再開して5分。
『はぁ…。』
『どうしたのよ。』
俺の溜息を聞き取ったのか、それともハルヒ特有の憂鬱オーラを俺も発する事ができ

るようになったのかは定かではないが、前の席の男がこちらに体を向け女口調で呟く。
『やはり体調が優れん…。』
『だから、風邪でしょ？』
『…いや…、また違う感覚だ。こんなの生まれて初めてだ。』
俺がそう言い終わるやいなや、ハルヒは何か思い出したかのように答えた。
『それね、たぶん昨日あたしの様子が変だった理由だと思うわ。』
何だそれは…。
確かに昨日のハルヒは変だったが…
『なんだよそりゃあ。』
『だから…あれよあれ。』
全くわからん…。
いつから”あれ”で済まそうとする歳になったんだ…。
あ、俺の脳か…
『本当鈍感なんだから…。女の宿命よ、宿命。』
不機嫌そうに言うハルヒを見てやっと全てを理解する事ができた俺は、やはりハルヒも普通の女性という事を改めて実感させられた。
『なるほどな…。だが症状には個人差ってのがあるだろうから、この感じがそれとは判

断しにくいだろうが。』

『うるさいわね。今回はひどかったのよ。ま、せいぜい苦しみなさい。』

そう言うといたずらっぽく笑って見せた。

…待てよ?

もしや俺達が入れ代わったのは、ハルヒが男の体に憧れたからなのではないか…?

なんて考えながら退屈な授業を受け、ハルヒが不機嫌のまま1限目が終了した。

『あんた、鼻の下なんか伸ばそうものならどうなるか分かってわよね?死刑よ死刑。』

などと、そこらへんの不良債権取り立て企業も顔負けの脅迫を俺にした後で、ハルヒは谷口と国木田に引き連れられ、女子で溢れかえる教室から出て行った。

…心踊る瞬間…。

それは言うまでもないだろうが…、体育の時間だ。

無論、体育がしたかった訳ではない。

そう…女子の更衣の瞬間を目と鼻の先で拝見する事ができるのだ!!

と、期待していたが…、あまりの目のやり場のなさに困り果てた俺はさっさと着替えを済まし、このキャピキャピ桃色空間から抜け出した。

あんな所にいたら鼻の下が伸びきってしまう…

俺はそそくさと体育館へ向かった。

ハルヒは今頃ソフトボールを満喫しているんだろうな…

『痛っ!!』

頭の中で色々と考えていたその時、突如飛んで来たボールが俺の体に直撃した。

『涼宮さん今日はどうしちゃったの？いつもならレシーブもアタックも完璧なのに。』

そう…、今俺はバレーボールをしているのだ。

しかも、”ハルヒ＝運動神経抜群”などというレッテルをはられている状況で…

正直…しんどい。

『ごめんごめん…。次はちゃんとするから…。』

『大丈夫…？熱あるんじゃないの…？』

『なんかいつもの涼宮さんじゃないみたい。』

ハルヒは女子に対していつもどんな言動をしているんだっ!!

つか女子とまともに話している所を見た事がないっ!!

分かるやつはここに来て教えてくれっ!!

『あははは…、大丈夫よ。』

こうして俺はグダグダな演技で体育を乗り切ったのだった!!
そして、再びの桃色更衣タイムがやって来た。
嫌な気はしなかったが…、刺激が強すぎる…。
やはり男ってのはパンチラあたりが一番萌え……ゴホンッ。

俺はさっさと着替えを済ませ机に座っていると、意気揚々とハルヒが帰って来た。
『どうだった?』
『楽しかったわよ。やっぱり男の体ってのはパワーがあるわね。ホームラン打ちまくりよ。』
自慢げに話す姿はハルヒそのものだ。
つか、大きな声で喋るな。
女子の変質者を見ているかの様な目が……あぁ…死にてぇ…
結局、なんだか楽しそうなハルヒを尻目に、俺は憂鬱な気分で授業を受ける羽目となった。

さて、心身共に疲れ果てていた俺だが、ついに放課後を迎える事ができた。
これで開放される！…なんて思ったのもつかの間…
『部室行くわよ。』
チーン。
まあ予想はしていたが…
『分かった分かった…。』
『古泉君とみくるちゃんをびっくりさせるのよっ♪』
『なっ…』
満面の笑みを浮かべながら言うハルヒ。
嫌な予感がするのは俺だけか…？
こうして俺達は部室へと足を運んだ。

『長門だけか。…今日は一体何を読んでるんだ？』
『…これ。』
そう言うと本の表紙を俺に見せる。

ん?”そーなんだ（創刊号）”…?

『ちょうどいいわ。今のうちに作戦会議よっ！』

『なんの作戦だよ…。』

『2人をびっくりさせる作戦に決まってるじゃないのっ。とりあえず、初めはお互いになりきって入れ変わってるのがバレないようにするのよ。いいわね?』

『分かったけど…、オチはどうするんだ。』

『ふふぅ～ん♪』

なんなんだその音符マークは…。

それに、その顔のにやけ方は相当ヤバイ事を考えているに違いない…

何やら作戦を立てていたその時、部室をノックする音が聞こえた。

『…ほらっ。返事しなさい。』

『おっ…、…ハ、ハーイ。』

『バカッ、そんなかわいらしい声出してどうすんのよっ……』

『こんにちは。』

古泉の爽やかスマイルはハルヒに向けられている。

そういや古泉って基本的に俺の方を見てる時にスマイルをフルスロットルにしやがるな…。

あぁ、気持ち悪い気持ち悪い。
『よう古泉。』
俺の声のトーンが一段階高いぞハルヒっ！
『今日は朝比奈さんがまだのようですね。ではキョン君、昨日のオセロ対決の続きでもしましょうか。』
まだ覚えてやがったか。
『オ、オセロ対決？いいぜ!!』
なんか変だぞっ。
『今日は負けませんからね。』
ふむ、ハルヒのオセロの実力が気になる所ではあるが、今はハルヒになりきらねばならない。
俺はパソコン前の椅子にドッカリと腰をおろし、不機嫌オーラを噴水のように八方に放出させておく事にした。
しかし…、しばらくすると眠気が襲って来た。
まぁハルヒが寝てようがおかしくは……いや、おかしいか。
だがここで睡魔を撃退する術など持ち合わせているはずもなく俺は机に伏せ、夢の世界へと飛び込んで行った。

『いやぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!!』
安らぎのお昼寝タイムもつかの間、突如響き渡った悲鳴に俺は飛び起きた。
どこだここはっ!!
…って、目の前にパソコンがあるという事は…部室だな…
しかし次の瞬間、俺の人生が１８０度変わってしまうかも知れないような光景が目に飛び込んで来たのだっ!!
『早く脱げ～♪』
『キョン君っ…やめて下さいぃぃ～／／／』
ＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔＷａｉｔっ!!!!!!!!!!
待て待て待てーいっ!!!
『おいっ!!何してんだーっ!!』
俺はハルヒにすてみタックルをかました!!
ハルヒに８６のダメージ!!…って違うな。

『朝比奈さん、大丈夫ですかっ!?』
『えぐっ…ぐすん……す、涼宮さん…。あたしもうお嫁にいけません……ひっく…』
ハァァルゥヒィィ…
『せっかくいい所だったのにぃ。』
何がいい所だっ!!
まだ部室だからよかったものの、公共の場でこんな事をしようものならっ…!!
『朝比奈さん、落ち着いて聞いて下さいね。』
『…涼宮さん?なんだかいつもと違う…』
『違っていて当然です!!だって、今俺はキョンで、そこにいる変態キョンはハルヒなんですからっ!!』
『……。』
おい…、どうしてくれるんだハルヒ。
『誰が変態よ。まぁいいわ。オチも大成功だった事だし、そろそろネタばらしね。』
オチ!?
今のがかっ!?
『実はね…かくかくしかじかで…』
こうしてハルヒの説明と俺の的確な解説により、朝比奈さんの誤解は解けたようだっ

た。
『そうだったんですかぁ。私てっきり…』
てっきり何だったんだ…？
それより、さっきから古泉が驚くそぶり一つ見せていないのはどういう事だ？
『なぁ古泉、お前この事知ってたのか？』
『長門さんにお聞きしたんですよ。』
情報の伝達速度はもはや音速を越えるな…
『やはり。じゃあ何で朝比奈さんには教えてあげなかったんだ。』
『僕自身この事を聞いたのは昼休みだったんですよ。長門さんに部室に呼び出されましてね。』
長門よ…、朝比奈さんがハルヒ（俺）に襲われるのを予測してわざと朝比奈さんには教えなかったんだな…？
『それより、オセロしませんか？』
『こんな状況でのんきにオセロか？…まぁいいか。』
どんだけオセロが好きなんだこいつは…、と思いつつも、オセロで古泉をフルボッコにしたいがために、俺はあっさりと了承したのだった。

日も暮れ、古泉とのオセロにも飽きかけていた頃、パソコンを閲覧していたハルヒが急に声を発した。
『キョン、今日はどうするの？流石に家に帰らないと大変な事になるわよ？』
あ～…その問題があったな…
『確かにそうだな…。二日も帰ってこなかったら親が黙っちゃいない。』
『今日は自分の家に帰るしかなさそうね…。』
『うまくいくか？』
『いかないと思う…。けど頑張るしかないでしょ。』
頑張りでカバーできる状況なのかよ…
『じゃあ、真の作戦会議といきますか。おい、古泉もない知恵を絞って考えてくれ。』
『ない知恵は絞れませんね。』
…ジーッ
『分かりましたよ。』
こうして俺達はお互いの家庭状況などを把握し、何か起きた時の対応などを確認しあった。

『よし、帰るか。』
『ええ。』
『うまくいく事を祈ってますよ。』
『おう。じゃあ俺達はこれで。』
俺達は部室を後にし、募る不安を消せないまま帰路についた。
そしてついに、いつも別れる場所までやって来た。
ここからは別行動だ。
『いいか、絶対女口調で喋るんじゃないぞ。両親が悲しむからな。』
『分かってるわよ。あんたも変な事しないでよ。』
『しねーよ…。あと何かあったら連絡してこいよ。』
『うん。じゃーなハルヒ。』
『ん?あ、ああ。じゃあねキョン。』
最終確認もそこそこに、俺達はお互いの家に向けて歩み出した。

そして、気がつけば俺はハルヒの自宅の前に立っていた。

ヤバイ…。
いくらお互いの事を確認したからと言っても、実際に帰宅するとなったら緊張が…
しかし、ここまで来て引き返す訳にはいかない。
俺は生唾を飲み込んだ後でチャイムを鳴らした。
『はい。』
『あたしだけど。』
『あ、ハルヒ？今開けるわ。』
…ハルヒの母親…か。
一体どんなお方なのだろうか…。
『お帰り。お泊り会どうだったの？』
二重ロックのついたドアが開いたと同時に顔を覗かせたのはハルヒの母親と見られる女性だった。
なかなかの美人さんだ。
それにしてもハルヒもお泊り会を理由にしたのか…。
ベタベタだな…
『ただいま。おもしろかったわよ。』
『そう。寒いでしょうから早く入りなさい。』

こうしてハルヒの自宅に無事侵入（？）する事が出来た俺は、靴を脱ぎながらハルヒお手製の自宅マップに目をやった。
ハルヒの部屋は二階のようだ。
俺は周りを見渡しながら階段を上り、難無く目的の部屋へとたどり着く事ができた。
ここか…。
まぁ女の子らしい部屋だが、予想よりはサッパリとした感じだな。
俺はとりあえずベッドに座り、携帯を開く。
受信メールはない。
ハルヒのやつもうまくいってるという事なのだろうか。
そしてふと机に目をやると、発見してしまったのだ…東中の卒業アルバムを…
これは見るっきゃねーだろ、って事で一人一人の顔写真が載っているページを順にめくっていく。
いた…谷口だ…。
プッ…、クフッ…、なんなんだこの世界を揺るがすかのようなアホ面は…
『ハルヒー、ごはんよー。あとお弁当箱と体操着出しなさいよー。』
『プッ…、い、今行くー。』
中学校時代のハルヒを見れぬまま、俺はお弁当箱と体操着を持って一階へと向かっ

た。
その後、夕食を食べたのだが、父親の姿は見当たらなかった。
『ハルヒ、早くお風呂入っちゃいなさい。』
俺はハルヒお手製マップを頼りに着替えを用意し風呂場へと向かったが…、さてどうしたものか。
今はハルヒもいない事だし？何をしようがあいつには分からない。
だが、俺は目隠しをして風呂に入る事にした。
そうしなければいけなかった訳ではない。
俺自身がそうしたかったのだ。
こうして風呂からあがった俺は寝る支度をして部屋へと戻った。

足早に部屋へと戻った俺は、携帯電話が鳴っている事に気付いた。
発信元はハルヒ。
『キョン？』
電話越しに聞こえて来たのは元気のない声だった。

『ああ。何かあったのか？まさかバレたんじゃないだろうな…』
『うぅん、バレてはないんだけど…』
『ちゃんと目隠ししたかってか？それならちゃんと…』
『そうじゃないの。今なら元に戻れそうな気がするのよ…。外見た？あの天候なら雷の一つや二つは落ちるわよ。』
雨…？
さっきまで雨なんて降る気配すらなかったはずだが…。
俺は半信半疑でかわいらしい水色のカーテンをカーテンレールの端に押し寄せ、窓の外へと目をやった。
マジかよ…
窓の外に広がっていたのは、空が大泣きしているかのような豪雨と、厚い雲の間から時々光が漏れているという普段なら絶対に憂鬱な気分になるような光景だった。
俺は確信した。
ハルヒが元に戻りたがっている、そして今、あいつの願望を現実にする力が働いているのだと。
『確かにこの天候ならいけそうだ。』
『どうすればいいかしら…』

『待て待て、長門に聞いてみる。あいつならきっとどこに雷が落ちるか予測するなんて朝飯前だろう。ちょっと待ってろよ。』

俺はそう言うと電話を切り、アドレス帳から長門の電話番号を引っ張り出し、決定キーを押した。

『…何？』

うむ、相変わらず今にも消えてしまいそうな声だ。

生気を出せ。

『長門、雷が落ちる場所って予測出来るか？』

『…出来なくもない。でも、結局は彼女次第。彼女が望まなければタイミングよく落雷は起こらない。』

そりゃごもっともだ。

人に雷が落ちるなんて確率で言えばごく僅かだ。

しかし、やはりある程度の状況は決めておかなければ始まらない。

『…なんか、シチュエーションとか…』

『…なんでもいい？』

長門の”なんでも”がどの程度のものか理解に困ったが、今ならどんな事でもやってやろうと決心していた。

が、やっぱ無理だったね。
『踏み切りに進入して電車と接触…!?流石の俺でも無理だ!…何が流石かは解らんが…。だ、第一、そんな事して雷が落ちなかったら笑えないっ!』
『…彼女が強く願えば落ちる。』
『……。そりゃあそうだけどさぁ…、他に何かないのか?』
『…光陽園駅前公園中央に聳える木に雷は落ちる。』
『本当か!?何時にだ?』
『…8時36分。』
今は…20分か…。
くそっ、後16分しかないじゃないかっ!
『わ、分かった。ありがとな!また生きてたら連絡するっ!!』
『…頑張って。』
冗談まじりで言ってはみたものの、本当に生きて再び長門に会える気がしなかった。
しかし、このチャンスを逃す訳にはいかない。

俺は直ぐさまハルヒに電話をかけ直した。
『キョン…？どうだったの？』
『…今からすぐに光陽園駅前公園へ行かないと！』
『そこに落ちるのね!?』
『あぁ。ただし、１６分後だ。』
ここから自転車を全力でこいだとしても公園までは２０分はかかる。
飛ばすしかないな…
『１６分!?間に合わないわよっ！』
『大丈夫さ。俺達には鍛えられた足腰があるだろ？とりあえず今から自転車で公園に集合だ!!』
『待って、今あたしの自転車壊れてんのよ…。』
それを早く…
『２ケツするっきゃないだろ！自転車でこっちまで迎えに来てくれ！』
『わかったわよっ。じゃあね。』
慌ただしい会話の電話を終了した俺は、白いダウンジャケットを羽織り家の前へと飛び出した。
そしてしばらくすると、スウェットの上にコートを羽織ったハルヒが猛烈な勢いで自

転車を走らせ、俺の目の前までやって来た。
無論、傘などさしているはずもなくずぶ濡れだった。
『はぁ…はぁ…。疲れたっ…』
『よし行こう。ところで、俺が前か？』
『…あたしがこぐわよっ！』
そういうと荷台を叩き俺に乗るように合図した。
女の子は楽チンだな。
『キョン！時間通りに公園に着いた所でどうすればいいのか知ってんの!?』
『自転車で木にタックルだ！』
声が雨音に掻き消されないように、俺達は叫ぶようにして会話を成立させていた。
『本当それで戻れるの!?』
『知らんっ！お前次第だっ！』
『何よそれっ！』
なんて言い合いながらも、公園まであと少しという所まで来ていた。
そんな中、俺は公園に到着したらどうするのかを頭の中で整理しようとしていた…が…
デジャヴか…？

あろう事か俺達の目の前までトラックが迫っていたのだ。
待てよ…？
ここは昨日事故った交差点じゃないか!?
…待て待て待てっ！
心の準備があぁっ…
なんて思いも虚しく、大きな衝突音、そして光（？）と共に俺達は吹き飛ばされた。

……
どれくらいの時間が経ったのだろう…
俺は意識が朦朧としたまま体を起こした。
痛てぇ……体のあちこちが悲鳴をあげている。
そうだ…、ハルヒは…!?

辺りを見ますと3メートル程先に人が倒れていた。
俺は体を引きずりながら近寄る。
間違いない、ハルヒだ。
それも、本物の。
『おい、大丈夫か!?』
『…う…。痛ったぁい……』
よかった…。
これで死んでたら本当に笑えないしな…
『キョン…、あんた…! 戻ってるじゃないの!』
『まぁお前が元に戻ってた時点で分かったがな。』
『あたしも戻ってる…?』
ハルヒは自分の体を見渡す。そしてじっくりと見終わった後、俺の方を見た。
『よかった…。』
目を潤ませて言い終えたかと思うと、俺に飛び付くハルヒ。
俺の体勢も正座に近いものだったので支え切れず後ろに倒れる。
『おぃおぃっ。』
『やっぱり、あたしはあたしで、キョンはキョンがいいわねっ!!』

何を言ってるのやら。
でも、この太陽みたいな笑顔を見るのもなんだか久々な気がした。
『あの～』
ふいに後ろから声が聞こえて来た。
気まずそーに立っていたのはトラックの運転手だった。
『大丈夫ですか?』
『ありがとうございます。』
『へっ?』
こうして俺達はトラックにはねられるという人生で一度あるかないかの（二回目だが）貴重な体験をしながらも、宇宙のような寛大な心で（?）運転手を許し、痛む体を引きずりながら帰宅する事となった。
なんかこの展開二周目だな…
さっきまで降っていた豪雨は嘘のように止んでいた。

あぁ…俺の愛機（自転車）が…。

前輪の泥よけが歪んでやがる…。
まぁこれだけで済んだ事を第一に捉えるべきなのだろうが…
『ふぅ…。元に戻れたなぁ。』
『えぇ。よく考えるとこれって凄い事よね。』
『相当な。あっ、そうだ…長門に電話しないと。』
そう呟き俺はポケットから携帯を取り出した。
…ってハルヒのじゃないか。
『ほら、携帯。俺のも返してくれ。』
『はいはい。』
嫌そうに言うなよ。
俺はアドレス帳の長門有希にカーソルを合わせ、通話キーを押した。
『…何?』
電話に出ていきなり”何?”は高圧的すぎやしないか?
『長門、俺だ。無事に元に戻れたぞっ。』
『…そう。』
『でも、長門の言ってた公園に着く前に事は解決したがな。』
『…そう。』

なんだ…？
知ってたみたいな言い方だな…。
まさか…
『なあ、結局８時３６分に公園の木に雷は落ちたのか？』
『…さあ。』
うん、絶対に落ちてないね。
…って事は単に俺達を焦らせただけという事になるのか…。
くそっ、長門にだけは絶対的な信頼をおいてたってのによ…
『そうか。でもまぁ、戻れたからよしとしておくよ。』
『…うん。』
『じゃあ、また学校で。』
通話終了。
何なんだこの妙な脱力感は…
頭を抱える俺をよそに、ハルヒはいきなり訳の解らん事を言い出した。
『ねぇキョン、妹ちゃんをよろしくね。』
…あまりの意味の解らなさに、俺の思考は５秒間程停止した。
『な、何がだよ？』

『実は今、キョンの妹ちゃんが高熱を出してるのよ。』
高熱だと!?
ちゃんと手洗いうがいしないから…
『そうだったのか。』
『キョン君…キョン君ってうなされてたわ…。あたしも励ましてはみたんだけど、やっぱりキョンじゃないとダメみたい。』
なるほど…、ハルヒは高熱に苦しむ俺の妹の姿を見るに耐えられなくなり、元に戻る事を強く望んだ。
その結果、天候が急変し落雷を招いたという事か。
『全く。やっぱりあいつは俺がいないとダメなんだな。カワイイやつだ。』
『…シスコン?』
『ち、違っっ!』
冷たい視線を浴びつつも全力で否定する俺。
なんだかなぁ…
こうして俺はなんとも言えない気分になりながらも、気が付けばハルヒの自宅前まで帰って来ていた。

『じゃあな。そのどろどろダウンジャケット洗濯しとけよ。』
『あんただってどろどろコートじゃない。』
そうさどろどろさ。
これはクリーニング出さなきゃな…
『はぁ…。なんでダウン羽織って出て来たのよ。せめて汚れてもいいジャージとか…』
『知らん。急いでたから仕方ないだろう。』
『しょうがないわね。で、ダウンの下がパジャマって事はお風呂には入ったのね？』
『あぁ。流石に風呂にも入らずパジャマは悪いだろ。』
ん、なんだ？
この冷たい視線は。
薄目を開けてこっち見るな…。
まぁ次に発する言葉は安易に予測できたが。
『目隠し…したの？』
やっぱりか…。
つか電話で言わなかったか？

俺はいたずらっぽく言ってやった。
『あぁ。見ちまったら楽しみが無くなるだろ？』
『はぁ？な、何言ってんのよ…バカ。』
慌てふためいてすぐに目線を逸らすハルヒ。
冗談だって…
『じゃ、俺帰るな。』
『う、うん…。』
正直、体が入れ変わるなんてのはそんじょそこらのドラマかアニメ限定で起こり得るものだとばかり思っていた。
しかし、今回の出来事は俺の考えを根本から覆した。
まぁ、周りに宇宙人や未来人や超能力者がいる時点で俺の考えは覆されまくりな訳だが。
ただ、一つだけはっきりと言える事がある。
それは、ハルヒになってみて、日常にワクワクを感じる事がなかったという事だろう。
何故か？
単純に女の子の生活が楽しくなかったからという意味ではない。
うまく言語化出来ない（誰かの台詞だな）。

だから、今日はこう言って割愛させてもらう事にしよう。
”ハルヒになったらハルヒに会えないから”

俺はハルヒに別れを告げた後、泥よけの歪んだ自転車をごろごろ押して妹の待つ自宅へと歩み始めた。
『キョン！』
俺はハルヒの呼び止めるに声に反応してゆっくりと振り返る。
『明日学校サボるんじゃないわよっ！』
ハイビスカスのような笑顔で俺を見送るハルヒ。
俺は温かい笑顔を背に浴びながら再び自宅へと向かって歩き出したのだった。
『キョン！』
再び俺を呼び止める。
何だって言うんだ…？
『外出時にノーブラはないわよっ！』
グハァァァァァッ!!
ニンマリとした笑顔で俺を見送るハルヒ。

俺は冷ややかな視線を背に浴びながら再び自宅へと向かって歩き出したのだった。

明日、学校サボります。

チョコレートレイト（前編）※高校時代書いたのはここまで

時の流れってのは案外緩やかで、まだ春はやって来ないものかと首を伸ばして待っていたのだが、ついに麒麟も顔負けの長さにまで達してしまった厳しい寒さの残る２月。

このコートで生命を維持していると言っても過言ではない。

それくらい寒いのだ。

しかし、こいつはいつもに増して元気ハツラツオロナミ（ｒｙ

『よっ!!キョン!!』

たにぐ（ｒｙ

名前を出すのもめんどくさい。

こちとて寝不足ながら強制早朝ハイキングコースをだな…

『元気だな…。何かあったのか？』

『何か？お前、諦めてるからってそんな言い方するなよ。』

は？

『なんだよキョン、アホみたいな顔して。』

その言葉、そっくりそのまま返してやるよ。

『だから…、一体何があるんだ？』

谷口は目を輝かせながら俺の肩に手を乗せ、バカ面を近付けてこう言った。

『バレンタインだよバレンタインっ!!明後日は聖なる聖なるバレンタインＤａｙなんだよっ!!』

そういやそんなのあったな。

毎日が壮絶すぎて一般の行事を忘れちまってる。

俺の頭の中はハルヒワールドに洗脳されつつあるという事なのだろうか。

誰か、助けてくれ。

『で、そんなにテンションが高いって事は、お前はもうチョコをもらえる予定なのか？』

『あったり前だろ？こう見えて結構いい感じなんだぜ!?俺。』

どうも見えないし、いい感じでもない。

『そりゃよかったな。』

バレンタイン…か。

俺はもらえるのかねぇ…

谷口のやけに高いテンションに付き合わされながらもなんとか教室へと辿り着き、ドアを開けた。
まぁ、窓際にはいつも通りの不機嫌オーラを放つ”あいつ”がいた訳で…

『よっ。元気か？』
『あんたいつもそれ聞くわねぇ。』
頬杖をつき、ジットリとした目でこちらを見るハルヒ。
俺は目線を教室全体へと移した。
『まぁ、日課とでも言っておこうか。』
『あんたも暇ねぇ。』
違うと言い切れない自分が憎い…

ハルヒとの会話をそこそこに楽しんでいた頃、チャイムと同時に教室に入って来たのは誰であろう、岡部だった。

『席つけよー！』

岡部が明朗快活な笑顔を振り撒きながらが教室に一歩足を踏み入れた瞬間、うるさかった教室は静かになった。

しかし、よくいるんだよな…。

静かになったってのにまだボソボソっと喋るやつが。

とくにこいつとか…

『あ、キョン、あたし今日部活行かないから。』

俺も部活には行かん。

まず部活じゃないからな。

『何かあるのか？』

『用事。』

どうせたいした用事じゃないって事は分かっていたし、静まり返っている教室でこれ以上お喋りを続ける訳にもいかないので、俺はそうかの一言で済ましておく事にした。

それにしても岡部よ、この季節にTシャツとジャージでは寒さすぎやしないか？

熱血教室気取りも程々にして欲しい。

見ていて寒い。

いや、やっぱ暑苦しい。

なーんて考えながら俺は早くも机に伏せた。
寝不足なのだよ寝不足。

結局この日は学校に昼ご飯を食べに来たような1日となってしまった。
もちろん最後の授業も豪華夢の旅５０分コースを満喫したはず…だったのだが…
目が覚めて顔を上げるといつもの教室だった。
だが、生徒及び教師すらいない。
俺は目の前で起きてる状況を理解できないまま、黒板の上にある丸時計に目をやった。
…夢の旅1時間延長だと!?
あろう事か寝過ごしてしまったようだ。
そして、誰にも起こされる事なく授業終了から1時間が経過していたという事になる。
『やっと起きたのね。』
突如後ろから女の声が降って来た。
と言っても聞き覚えがある…というか毎日聞いてる声な訳だが…

『ハルヒっ!?お、お前まだ残ってたのかっ！』

誰もいないと思い込んでいた俺は、驚いて若干声が裏返ってしまった。

『あんた、起こしても起きかったのよ。それに、幸せそうな寝顔だったし?起こしたら悪いかな～って。…あ、よだれ垂れてるわよ。』

…ジュルッ

『俺の寝顔を見やがったな…。つか、わざわざ待っててくれたのか…?』

『あんただけ教室で寝てるなんて可哀相でしょ。ん、カーディガン返しなさい。』

カーディガン?

…また掛けてくれてたのか。

俺は背中に掛かっていたカーディガンをハルヒの差し延べた手の上に置いた。

『そういやキョン、寝言言ってたわよ?』

『ね、寝言!?』

俺よ…変な事言ってたら死刑だぞ…?

『そ。朝比奈さ～んってね。』

おもむろに腕を組み、嫌味っぽく笑うハルヒ。

俺ってやつは…

『俺そんな事言ってたのかっ!?確か夢の中では古泉が女になってて…』

『じょーだんよ、じょーだん。』
おまえ…。
まぁ、本音を言った所夢の中に古泉が出て来た事の方が許せないがな。
『何だよそれ…。あ…、なんか待っててくれてサンキューな。』
『い、いいわよ別に。それじゃあたし用事があるから帰るわねっ。』
白のダウンを羽織るや否や、足早に教室を去ろうとするハルヒを俺は呼び止めた。
『ハルヒ、用事って何なんだ?』
『…用事は用事よ。』
そう言い残すと後ろを振り返る事もなくスタスタと歩いて行ってしまった。
ハルヒの用事の詳細が気になったが、考えても始まらない。
朝比奈さんが待っている（?）部室にでも行くとしよう…
俺はまだ眠い目を擦りつつ教室を後にした。

部室にハルヒがいない事は分かっていた。
だが、思わずノックをしてしまうのは何故だろう。

『は～い。』
　きっと犯人はこの人…、いや、ハルヒだな。
『こんにちは。』
　俺は笑顔で挨拶をする。
　別にニヤニヤなんてしてないからな。
『こんにちは。あら、今日は涼宮さんは来てないんですか？』
　小鳥のように首を傾げる朝比奈さん。
　いかん、抱きしめたい。
『なんかあいつ、用事があるとか言って帰って行きました。』
『そうなんですかぁ。あ、今お茶入れますねっ。』
　俺はいそいそとお茶を入れ始める朝比奈さんを眺めて少しニヤニヤした後、おもむろに床に置かれた電気ストーブに身を寄せた。
『涼宮さん、どうしたんでしょうね。』
　なんだ古泉、話しかけるな。
　体温が下がる。
『解らん。まあたいした事じゃないって事だけは確かなんだろうが。』
『果たしてそうでしょうか…。』

白い歯をちらつかせて怪しげな笑み浮かべるスマイル古泉。
『はい、お茶ですよ。』
『あ、ありがとうございます。いただきます。』
今日もメイド服を身に纏った朝比奈さんはおぼんを胸の前で抱え、女神のような笑顔で微笑んだ。
それに比べてなんだ、古泉の微笑みは。
見てられん。
『で、何が果たしてそうでしょうか、なんだ？』
『涼宮さんはある企みをしているとしか考えられません。』
ある企み…？
『また不思議探しか？』
『いえいえ。男のあなたなら意識してるのではないかと思っていたのですが…、結構鈍感なのですね。』
『俺が鈍感ならお前は鈍化ってか。』
『おもしろい事を言いますね。ですが、今回の事は実に深刻な問題なのですよ。』
古泉の目が開く。
真剣な事を言う時に限って目を開くんだよな、こいつ。

『一体何があるって言うんだ…？』
『涼宮さんはバレンタインチョコを作ろうとしているのですよ。』
『あのハルヒがか？』
『はい。』
北校の男子は誰一人としてハルヒのチョコなんて受け取らないだろうな…
『それのどこが深刻な問題なんだ？』
古泉は髪をかき上げた後、俺を見つめて説明を続けた。
見つめるな。

『チョコを作る事に関しては全く問題はありません。しかし、チョコを渡す時が問題なのです。』
『渡す時？』
『はい。義理チョコでもない限り男の人にチョコを渡すというのはとても緊張するでしょうし、恥ずかしい。それも本当に好きな人となると尚更です。つまり、渡す時には大きなストレスとプレッシャーが心に重くのしかかります。』

お前に女心の何が分かるって言うんだ…

『うまく渡せたらいいのですが、仮に勇気がなくて渡せず仕舞いなんて事になったら…それはもう大変です。普通の女子の場合なら未だしも、涼宮さんとなると…。どうなるかは想像できますよね？』

『閉鎖空間…か？』

恐る恐る回答した俺に笑顔で頷く古泉。

マジかよ…。

バレンタインごときで世界崩壊の危機ってか…

もう映画かなにか出た方がいいぞ。

『そうか。ハルヒは一体誰にチョコを渡すつもりなんだ？』

『それは…、いずれ解るでしょう。』

満面の笑みでお茶をすする古泉。

『はぁ…。で、結局の所俺にどうしろと？』

『そうですね…、受け入れる事位ですかね。』

何を言ってるんだこいつは…

『要するに、時が来れば解るって事だな？』

『まぁそんな所ですね。』

『分かったよ。よく解らんがな。』
古泉は俺の曖昧な返答に苦笑を浮かべた。
こうして俺は朝比奈さんが入れてくれたお茶を飲み干し、一足先に帰る事にした。
…バレンタインねぇ。
まさかハルヒのやつ、俺にチョコを渡すつもりとか…？
うーむ、あまり期待は出来ないな。

翌日、俺はまたもや朝から憂鬱な気分になっていた。
たにぐ（ｒｙ
『いよいよ明日だな。楽しみすぎて夜も眠れね～よ。２年になる前に彼女の一人や二人は欲しいからなぁ。』
一人や二人？
ふ　ざ　け　る　な
『お前にはもう彼女がいるじゃないか。』
『え!?誰だよ!まさかひそかに俺の事を想ってる子がいるとか!?』

『国木田。』
『だから何でいつも国木田なんだよっ!!』
谷口をからかいながら登校した俺は、いつものように学校に着き、見慣れた教室に入り、退屈な授業を受け、何の変哲もなく放課後を迎えたのだが…
『キョン、あたし今日も部活出れないから。』
ハルヒが部活（？）を休むという点だけは違っていた。
まぁ、昨日もそうだったのだが。
『分かった。また用事か？』
『そ。用事。』
古泉の言っていた事が本当なら、今日は帰ってせっせとチョコを作るのだろう。
って事は昨日は買い出しか？
なんて考えていると、ハルヒはひょいっと教室を出て行ってしまった。
俺はなんだか取り残された気分になりつつも、部室に出向く事にした。
ん？
朝比奈さんに会いたいだけですが何か？

俺はいつものようにノックを忘れない。
『はぁーい。』
扉を開けてくれたのは朝比奈さんだったのだが…
『あれ、今日は朝比奈さんだけですか?』
珍しい事に文芸部員の長門も、スマイル古泉も姿が見えなかった。
『そ、そうなんです…。と言うより、席を外してもらったと言った方が正しいのかもしれません…。』
『朝比奈さんが二人に…ですか?』
『はい…。』
朝比奈さんは両手を後ろに組み、恥ずかしそうに俯いている。
『キョ、キョン君っ…、受け取って欲しい物があります…』
受け取って欲しい物…?
まままさかっ!!?
『なっ…何でしょう。』
『これ…』
両手で差し出したのは、ピンク色のラッピングが施されている小包だった。

かわいいリボンもついている。
『これって…』
俺は正直それが何なのか理解できたが、念のために確認した。
『は、はい。バレンタインチョコですっ…。』
キタキタキタキターっ!!
あの朝比奈さんからチョコをもらえるなんて誰が予測出来ようか。
天にも昇る気分です。
『あ、ありがとうございます!』
『開けてみて…?』
お言葉に甘えて、俺はゆっくりとラッピングを解き、箱を開けた。
『こっ!これはっ!』
『ごめんなさい、キョン君…。今の私にはそれが精一杯なんです…』
箱を開けるとハート型のチョコが二つ入っていた。
しかし、それぞれに一文字ずつ”ぎり”とホワイトソースらしきもので書かれていたのだ。
『私はこの時代の人間じゃありません…。だ、だから、あなたに思いを伝えてもそれは叶わない事…。それに、私のせいで世界が…あっ…。ごめんなさい…。』

朝比奈さん…

『解りました。仕方のない事なんですね…。』

『はい…。だから義理チョコって事で…。』

『…ありがとうございます。朝比奈さんに貰えるなら義理チョコだろうが麦チョコだろうがお構いなしですっ！』

俺のあたふた気味な返答に、くすりと笑う朝比奈さん。

『涼宮さんに見つかってしまっては元も子もないので1日早く渡させてもらいました…。』

『ハルヒに見つかったら？』

『あっ…いずれ解ります。…紅茶入れますね。』

朝比奈さんまで古泉と同じような事を…。

まぁ、いいか。

その後朝比奈さんのお手製チョコを味わいながらお茶を楽しんだ。

朝比奈さんと二人きりの静かな部室で。

さらに翌日…
言うまでもないだろう。
たに（ｒｙ
『いよいよ今日だな。』
『…だな。』
『お前貰える兆しがないからってそう落ち込むなよ。』
ふっ、言っておけ。
俺は北校の天使からチョコを貰ったんだぞ。
…義理って事は内緒で。
『谷口、お前チョコ貰えなかったらどうするんだ？』
『そうだなぁ、泣き寝入りだな。』
そこは言い返せよっ。
『貰えなかったらジュースおごってくれよ。』
『貰えなかったらおごるのか？お前も酷い奴だなぁ。涼宮にいつもひでー扱いされてるからストレス溜まってんじゃねーの？』
あながち間違いじゃない…
『ま、それだけ自信満々なんだからジュースくらいいいだろ。』

『しゃあねぇな。ま、あまり期待するなよ。アハハハハハッ!!』

……

やれやれ。

結局今日もバカと一緒に教室にやって来た俺はそそくさと自分の席に着き、後ろで窓の外を眺めている奴に声を掛けた。

『よっ。』

『……元気かって聞かないの？』

『元気か？』

『別に。』

なんだそれは。

そこまでが一連の流れになっているのか？

『ハルヒ、今日は部活行くのか？』

『行ってもいいけど…。あんたはどうすんのよ。』

頬杖をついて目線を変える様子もない。

人と話してる時くらいこっち向けぃ。
『俺は朝比奈さんのお茶を飲みに…、つかお前は団長なんだから顔出しとかないといけないんじゃないか？』
『確かにそうだけど…。じゃあ…今日は行くわ。』
少し不満そうな感じだな…
『席つけよー。』
チャイムはまだ鳴っていないにも関わらず、岡部が勢いよくドアを開け教室に侵入して来た。
あぁ…、今日も1日教師達による退屈な談話ショーを聞かなきゃならんのか…

『はあぁぁぁ…』
本日の授業を全て終え、心身共に戦争から帰還した兵士の様な状態だった俺は、大きなため息を漏らした。
『キョン、部室行くわよ。』
ハルヒは鞄を持ち、颯爽と席を立ち上がる。

俺も疲れきった体を渋々起こした。
『よし、行くか。』
こうして俺達は部室へと足を運んだのだが…
『ん?今日は誰もいないのか?』
ドアをノックしても返答がない。
『珍しいわね。』
『ま、そのうち来るさ。』

が、俺の予想は見事に外れ、結局誰も来ないまま1時間が経過した。
その間俺はお茶を煎れたり、一人黄昏れてみたりと、穏やかな時間を過ごしていたのが…
『ハルヒ、さっきから何見てるんだ?』
ハルヒと言えば、先程からパソコンと睨めっこをしている。
『ななな何にもないわよっ!…そ、それにしても暇ね。』
今確実にウインドゥの×マーククリックしただろ。
『オセロでもするか?』

俺はオセロ盤を掲げて見せた。
『オセロ?仕方ないわね。じゃあ、あたしが勝ったらなんでも言う事聞きなさいよっ。』
そう言って不敵な笑みを浮かべた。
正直、負ける気はしなかったが、どうせ俺が勝っても何もないんだろうな。
なんて考えている間に戦いの幕は上がったのだが…
『ああーっ!なんでそこひっくり返んのよっ!!』
案の定、俺の圧勝であった。
ふっ、巷で”オセロのキョン”と呼ばれる俺に敵うはずあるまい。
『俺の勝ちだな。出直して来いっ。』
『オセロヲタク。』
『うるせっ!』
拗ねるハルヒをよそに俺はオセロを片付け始めた。

『ねぇキョン、今日何か用事とかある…?』
俺がせっせとオセロ片付ける姿を見ていたハルヒが声を掛けて来たのは、ちょうどオセロを棚にしまおうとしていた頃だ。

『いや、何もないが、どうした?』
『…ちょっと付き合ってよ。』
いつものハルヒなら”付き合いなさいっ!!”なんて言いながら、俺のネクタイを強引に引っ張って行くはずなのだが。
『特に用事はないが…、一体どこへ行こうって言うんだ?また不思議探しか何かか?』
『ち、違うわよ。』
『じゃあなんだ?付き合ってってのはそのままの意味でって事か?』
『バカ…。とりあえず学校を出ましょう。』
一息にそう言い終えると足早に部屋を出て行くハルヒ。
『ちょ、待てって。』
俺はとくに急ぐ事なくコートを羽織った後、何か企んでいると思われるハルヒを追いかけた。

ところで、モテ期と言われるものを信じている人は、この世にどれ位いるのだろうか。
…俺はどうかって?
俺はたった今信じたね。

ハルヒを追いかけ、やっと追い付いたかと思うと、今度は下駄箱で姿をくらましやがった。
まあ、あいつが付き合ってって言ったんだから、本当にそのまま置いて行くなんて事はないだろう…
そんな事を考えながら、上履きをロッカーに入れようとしたその時、
『…キョン…君？』
聞き覚えのある、なんともおしとやかな声が俺のすぐ後ろで聞こえた。
俺は恐る恐る振り返る。
『あ、あなたは…』
『い、いきなりごめんなさいっ。』
あろう事か、そこに立っていたのはクラスメイトの田中さん（仮称）だった。
彼女はクラスの女子の中でも、割りと静かな方だった気がする（もちろん眼鏡っ子）。
勿論俺とは数回話した事がある程度で、これと言って親密と言う訳でもない。
しかし、バレンタインデイの放課後に声を掛けるなんて、用件は一つしかないだろう。
俺が今日初めてモテ期を信じたのは、これが理由なのだ。
『田中さん、こんな時間に一体…』
『実はお願いしたい事があるんですけど…』

チョコ受け取って下さいってか？

喜んで。

『これ…』

そう言って差し出したのはこれまたかわいいラッピングが施された小包で、俺は脳裏でこの小包と朝比奈さんに貰ったものとを重ね合わせていた。

『こ、これは…？』

『実は…、これを谷口君に渡して欲しいんです…。』

……

何かのドッキリか？

谷口にチョコを渡したいなんて思っている人が、この世に存在したなんて…

『谷口に…ですか？』

『はい…。本当は今日、谷口君に直接渡すはずだったんですが、渡しそびれてしまって…。このままだと明日も渡せそうにありません。だから、谷口君と仲良しのキョン君に渡して貰おうと思ったんです…。』

それは全然構わない。

俺へのチョコじゃなかった事も構わない。

ただ、谷口と仲良しってのは許せない。

『解りました。じゃあ、明日渡しておきます。』
『本当にありがとうございますっ！ではっ。』
呆然と立ち尽くす俺に笑顔で会釈した田中さんは、とことこと走り去って行ってしまった。
俺は彼女の笑顔に心を和ませながら、学校を出るべく後ろを振り返った。
が…次の瞬間、俺の目に飛び込んで来たのは、嫌悪感丸出しの様子で俺を見るハルヒの姿だった。

『よかったわね。』
俺と目が合うや否や、冷ややかに言い放つハルヒ。
このチョコは俺宛てじゃないと言いたかったのだが、あと2秒遅かった。
俺が言葉を発っする前に、その艶めく黒髪をひらりとなびかせ身を翻したハルヒは、足早に門扉へと歩き出した。
『お、おい、ちょっと待てよ！』
俺の呼び止める声に、意外にも足を止める。

全く…、いつも勝手に行動しやがって…
『これはだなぁっ…』
『やっぱり今日は帰る…。』
またかよ。
まるで俺が口を開く瞬間を見計らってるかのようだな…
まあ、向こうを向いたままだからそれはないだろうが。
『なんだよそりゃあ。』
『いいから今日は帰る。じゃあね…。』
そう言い残すと、ハルヒはあっと言う間に俺の眼中から姿を消した。

何なんだあいつ…
俺は自室のベッドに横になりながら考えていた。
今日俺に付き合ってと言ったのは何故か。
普通に考えると、俺にチョコを渡す為にどこかに寄ろうという事なのだろうが…
しかし、教室での様子もオセロをしている時の様子もいつものハルヒと変わらなかった。

女の子ってのは、これからチョコを渡すとなったら態度が変わったりするものではないのか？
それともあいつは俺にチョコを渡すつもりなんて更々なかったとか…？
あぁ、解らん…
一人であれやこれやと考えている内に睡魔が襲ってきた。
俺は瞼をゆっくりと閉じる。
さあ、俺を安らぎの夢へといざなってくれ。

ん？
気が付くとそこは、自室ではなかった。
ちゃんとベッドで布団に包まりながら寝たはずなのだが…
俺はゆっくりと体を起こして辺りを見回す。
ここはどうやら俺が通う学校のようだ。
って待てよ…？

この状況…前にも…

……

ただ一面に広がる暗い灰色の平面。

単一色に塗り潰された燐光を放つ天空。

月も星も雲さえもない、壁のような灰色空。

世界が静寂と薄闇に支配されている。

閉鎖空間。

って前にも言ったな。

『ん…』

その時、俺の真後ろからうめくような声が聞こえた。

俺は直ぐさま振り返る。

そこには、セーラー服姿で地面に寝そべるハルヒが安らかな寝息を立てていた。

『おいっ、起きろ！』

『ん…まだ目覚ましは鳴ってないでしょ…』

誰かが言ってた台詞だな…

俺は構わず体を揺する。

『起きろって！』

『…嫌よ…』

こいつ…

『起きろって言ってんだろうがっ!!』

ハッと上半身を跳ね上げるハルヒ。

バカか。

『…キョン?』

未だ状況が理解出来ていないのか、ハルヒは不思議そうな目で俺を見てから辺りを見回した。

『ここ…、学校?』

『そうみたいだ。』

『これ、前にもなかった?』

やっぱ覚えてたんだな。

『そうだっけ?』

俺は曖昧に答えた。

ハルヒにはあの出来事は夢だったと思っていてもらいたい…というより、俺自身そう思いたい。

『じゃあ…、あたしまた夢を見ているのね…。』

闇に照らされたその表情はどこか悲哀を感じさせた。
『夢…、そうだな。お前は夢を見てるんだ。ま、とりあえず部室に行こう。』
俺はハルヒに暗示を掛けた後、古泉が来るであろう部室へと歩き出した。
『おいハルヒ、行くぞ。』
何やら来るのが遅いハルヒを呼ぶ。
今何か拾ってなかったか…？
『あ、今行くわ。』
こうして不気味な静寂に包まれた校舎内に土足で侵入し、またもや俺のブレザーの裾をつまんむハルヒにじれったさを感じながらも、目的地である文芸部へと辿り着いた。
『一応ノックしとくか。』
『何でノックするのよ。』
お前のせいだ。
『朝比奈さんが脱がされてるかも知れんだろ。』
『バカ。』
上目遣いで俺にきつい視線を送った後、おもむろにドアを開ける。
案の定部屋には誰もいなかった。
だが、窓からは漆黒の光が差し込み、見慣れたこの部屋でさえも異様な空間に感じら

れた。

俺は電気を点ける。

チカチカと音を立てた後、蛍光灯は光を宿した。

部屋に入るや否や、ハルヒは窓際まで駆け寄る。

『この夢、妙にリアル過ぎない？』

何かを疑うかのように呟いた。

『ああ。髪の毛引っ張っても痛いし。でも、こんな世界が現実な訳ないだろう。』

これが現実だなんて知ったら、それこそ古泉の言う通り世界は崩壊するであろう。

ハルヒにこれは夢であると認識させる必要があった。

『そうよね…。じゃあ、この世界だったら何をしようが問題ないって事？』

こちらを向く。

何かに期待したような目だった。

果たしてこの世界で何をするつもりなのだろうか。

『まあ、現実には何の影響も及ぼさないだろうな。所詮夢だ。』

『へぇ…。』

ハルヒはまた窓の外へと視線を移動させる。

そして何かを決心したかのように、

『キョン、渡したい物があるんだけど。』

そう言い終えるや、俺の返事を待つかのように黙り込んだ。

その背中は何故だか哀愁を漂わせていた。

『何だよ。』

静寂に包まれた空間を切り裂くように、俺は訊いてやった。

俺の妙に落ち着き払った声に反応したハルヒは、首だけをワンテンポ遅らせるようにして振り返った。

『これ…。』

机の横にぶら下がっていた黒い光沢を放つ紙袋の紐に指を掛け、持ち上げたと思ったら俺の目の前に突き出した。

正直、この中に何が入っているかは予想できた。

『これは…』

俺は紙袋を受け取る。

そして、中を覗き込むと入っていたボール紙製の小箱を取り出した。

蛍光灯の光に照らされて露になったそれは、薄桃色のプリントが施され、鮮やかな紅色のリボンで十字に結ばれていた。
『バレンタインチョコよ。』
床に目を落としたまま呟くハルヒ。
現実で渡しそびれたから閉鎖空間で渡すってか…？
こいつ…バカだ…

『お前、いいのか？』
俺の返答が予想していたものと違っていたのか、ハルヒは驚いたように顔を上げ、目を細める。
『夢の中で俺にチョコを渡して、それで満足なのか？』
呆れたように言い放った俺の言葉に何を感じたのか、
『…あたし…バカよね。』
自嘲するように鼻で笑うハルヒ。
『渡す勇気がないからって夢の中で渡すなんて、どうかしてるわ…。』

目線を横に流し、暗い面持ちで続けた。
『下駄箱でクラスの女子があんたにチョコ渡すの見て、引け目を感じちゃったのかな…。いつもあんなに威張ってるのに…バッカみたい。』
こんなハルヒは見た事がない。
と言うより、見ていたくない。
『ハルヒ、一つ誤解があるようだ。』
やっと言える。
今回はちゃんと聞けよ。
『俺、クラスの女子にチョコ貰ってただろ?あれ、俺宛てじゃないんだ。』
『えっ?じゃあ…』
『あれは谷口に渡して欲しいってお願いされたんだ。』
ハルヒは驚いたように目を見開いたかと思うと、再び溜息と共に表情を暗く染めた。
『あたしったら何都合のいいように考えてるのかしら…。』
お前なぁ、これを信じてもらわなきゃ困るんだよ。
『だーかーらー、俺はまだ誰からもチョコを貰ってない。』
まあ、朝比奈さんに貰ったのは本命じゃないから対象外だ。
『そう…。ごめんねキョン、渡せなくて。』

おひ…

『…渡したかったな……。』

その悲しげな表情を見て、俺はいっそ本当の事を言ってやろうかと思った。

これは夢なんかじゃない、これは現実だ、俺は俺なんだって。

でも、それは許されないって事くらい分かっていた。

『ハルヒ、明日…チョコ持って来てくれよな。』

俺の突拍子な発言が可笑しかったのか、思わず笑みを零すハルヒ。

『持って行くわ。あ、持って行くだけよ。』

冗談っぽく言うハルヒに俺は真剣な眼差しで言ってやった。

『俺、ずっと待ってるから。お前のチョコ。』

一時の沈黙の後、

『わ、分かったわよ…。って言うかお前のチョコって、他に貰える当てなんかないでしょ？』

『うるせっ！』

閉鎖空間に来てハルヒが初めて見せた太陽のような笑顔。

その笑顔は、この世界、そして俺の心を明るく照らすようだった。

『じゃあ、また学校でね…』

ハルヒが穏やかな目でそう言った瞬間だった。
俺の目の前は見慣れた自室の天井と化し、空間には刻を刻む針の音だけが響いていた。

夢だったのか…？
いや、夢じゃない。
鮮明に覚えている。
俺、なんて事言ったんだろうか…。
我ながら鳥肌が立つ。
…まぁいいか。
時計は3時を回った所だった。
もうひと眠りするには十分な時間がある。
眠い。
前回と違って汗一つかいてなかった俺は、再び瞼を閉じた。

妙な息苦しさを感じたのは、窓から爽やかな冬の陽射しが差し込んで来た頃だろう。
その原因はすぐに分かった。
『キョン君起きてぇ―！』
腹の上に乗るな。
内蔵が潰れる。
『起ぎるっ、起ぎるがらぁ…。』
俺は纏わり付く小悪魔を死に物狂いで押しのけると、渋々ベッドに別れを告げた。

学校に着いても、俺の眠気は飛んで行く気配を見せなかった。
夢現で教師の話を聞く俺は、後ろに座ってる奴の妙な静けさにある情景を思い出していた。
閉鎖空間。
あいつはあれを夢だと捉えているのか、それとも…
いや、実際夢だったのかも知れない。

朝に挨拶をした時も、何事もなかったかのような振る舞いだったしな。
『なあハルヒ。』
『何よ。』
『いや、何でもない。』
ハルヒの鋭い視線に、これ以上会話を続けても不機嫌を増大させるだけだと判断した俺は、何か言おうとしてやめた。
特に内容のなかった俺の声掛けに、「じゃあ喋り掛けてくんな」と言うかのような目をして窓の外へと視線を移すハルヒ。
閉鎖空間での笑顔はどこへやら。
やっぱ…夢だったのか？
こうして普段と何等変わらない授業を受け、何事もなく放課後を向かえた俺はズカズカと部室へ向かうハルヒの背中をただ追い掛けた。
部室前まで来たハルヒはノックもなしに扉を開き、俺は部屋の中に妖精さんが立っているのを見た。
うむ、今日も朝比奈さんのお茶が飲めるぞ。
おっと、長門もいた。
部室に入るや否や、ハルヒは団長机に置いてあるパソコンのスイッチを入れ愛嬌一つ

ない声で、
『みくるちゃん、お茶。』
凄い態度だな。
朝比奈さんをメイドのようにこき使うとは許せん。
無論、メイドの格好してるのだが。
『た、ただいまっ…。』
朝比奈さんは一瞬びくっとなってからお茶の用意を始めた。

俺がせっせとお茶を入れる朝比奈さんを眺めていた頃、そよ風の如く部屋に入って来たのはニヤケハンサム野郎で銀河に名を轟かせる古泉だった。
『おっと…。』
古泉は一瞬驚いた様子を見せた後、「なるほど」と言うかのように満足げな表情を浮かべた。
『何がおっとだよ。』
『いえ、何でもありませんよ。ただ、希望はまだ潰えていないようです。』

希望？
潰える？
アニメか何かか？
『そりゃよかったな。』
俺が適当に返事をするとこりゃまた気持ち悪い笑みを浮かべて、
『あなたのおかげですよ。』
『俺が何したって言うんだよ。』
『まあ、いずれ解ります。』
古泉は俺との会話を成立させながらおもむろに鞄を置き、カードゲームを用意し始めた。
そしてフィールドシートを机に広げ終わるとこちらにキラキラした目線を送ってきた。
やろうって事か？
『オセロでは負けましたが、このカードゲームでは負けませんよ。』
このカードゲームでボッコボコにいかれたのはどこのどいつだっけ？
『はて、誰でしょう。』
お前だよお前。

しかし、特にする事もないので付き合ってやってもよかろう。
言っておくが、付き合うってそういう意味じゃないからな。
『はい、お茶ですよぉ。』
『あ、ありがとうございます。』
俺は朝比奈さんが煎れてくれたお茶を一口啜った後、
『始めるぞ。』
『どうぞ。』
戦いの幕は上がった…のだが…
『おや、また負けてしまいました。』
弱すぎてつまらん。
かれこれ8ゲームはやっているぞ…。
あ、こいつ格ゲーで弱いくせに何度も乱入してくる奴みたいだな。
そういうやつには舐めプレイでおもてなしするのが礼儀ってもんだ。
言っておくが舐めプレイってそういう意味じゃないからな。

ぱたん。
俺がわざと弱いカードを出そうとした瞬間だった。
静寂に包まれたこの部屋に、本を閉じる音が響く。
どうやら長門が読書を終えたようだ。
『長門、今日は早いな。』
長門は分厚い本を鞄にしまい始めた。
ご存知とは思うが、ＳＯＳ団の活動終了時間は長門の読書終了に比例している。
誰が決めた訳じゃない。
言わば暗黙の了解ってやつだ。
『では、僕も帰ります。』
古泉は手札を机の上に置き鞄を持つと、颯爽と席を立つ。
『じゃ、じゃあ私も…。』
さっきまで俺の隣にちょこんと座っていた朝比奈さんもゆっくりと立ち上がる。
『じゃあ俺もか…』
俺も帰ると言おうした瞬間、いつもと違う古泉の視線を感じた。
『な、なんだよ。』
『キョン君、朝比奈さんが着替えるのでとりあえず廊下へ。』

そう言うと鞄も持たない俺の背中をぐいぐい押して廊下へ出る。
と同時に長門も廊下に出て、振り向く事もなく帰って行ってしまった。
『何なんだ？いきなり。』
『まあまあ。涼宮さん一人残しては帰れないでしょう。』
ハルヒ？
あいつも帰るだろ、どうせ。
さっきから暇そうな顔でパソコン画面を眺め、マウスをかちかち鳴らしていたしな。
『彼女はまだ帰らないかと。時を待っているのですよ。』
俺が頭上に疑問符を浮かべていると、うっすらと目を開けて言った。
『あなたと二人きりになれる瞬間をね。』
二人きり？

（昔の自分が執筆していたのはここまでです。
正直オチをどうしようとしていたか忘れてしまっていて
なんだか悔しい気持ちです。ですがこの小説はハルヒとキョンの
非エロのＮＬを書きたかったんです。タイトルは正直釣りですねｗ
ハルヒ自体短編集みたいな感じなので

この小説もどうやって完結させるかは考えていませんでした。
ただハルヒとキョンの甘酸っぱい感じのストーリーを考えては
書いていくという感じでしたね。
いやー、あのころの自分はよくこんな長文書けたなぁと思います。
谷川先生っぽい言い回しにするために小説とにらめっこしながら
書いた覚えがあります。でもこうやって創作したものを残しておくと
時が経った時に見返すとめちゃ面白いですよね。
あの時頑張って書いてた光景が蘇ってきます。
ストーリーの続きはもしかしたら描くかもしれません。
むしろ今書いたらどんな物語が作れるのか気になるまであります。
それではここまで読んでいただきありがとうございました！
りりぅむ
※２０２１年７月２５日追記…この話の続きを書いてみました。
ぜひご覧ください。

チョコレートレイト（後編）※２０２１年７月連載再開

（高校生だった自分からのバトンを受け継ぎ、
続きを執筆してみようと思います。２０２１年７月２２日　りりぅむ）

━━━

二人きり？あぁ、そういうことか。
こいつは閉鎖空間での出来事を見ていやがったわけだ。
全て知ってます、みたいな顔が癪に障る。
でもまぁ、俺も期待していなかったわけではない。
あくまでもそんなことあるはずがないというスタンスでいたかっただけなのだ。
なぜなら、それが叶わなかった時に
一人で勝手に辱め《はずかしめ》を受けることになるのは
この俺なのだから。

ーーだが結論から言うと、
ハルヒは、本当に持ってきやがった。

部室に夕日が差し込み始めた頃、
俺たちを二人きりにするためなのか
超常3人組がそそくさと帰り支度を始める。
それを見るやいなや、
さっきまで団長机に突っ伏していたハルヒが体を起こし
『ちょっと待って。』
そう呼び止めながら立ち上がり
自分のかばんをゴソゴソとあさり始めた。
『昨日バレンタインだったでしょ?でも渡しそびれてたから。
はいこれ。』
出口に集まっている3人の元に歩み寄りながら
かばんから取り出したのは、

小さめではあるが星やらハートやら、
かわいい模様が印刷されている茶色の紙袋だった。
それを古泉、朝比奈さん、長門の順番で渡していく。
『おや、これは嬉しいですねぇ。』
『わぁ…っ！涼宮さんありがとうございますぅ！』
『……』
３人の少し驚いた様子からするに、
いや長門は驚いてはなかったが…、
自分たちにチョコを作ってくることは
想定外だったのか…？
『ちょっと急ぎで作ったからできは保証しないけど、
せっかくのバレンタインなのに何も無しってのは味気ないでしょ？』
少し照れつつも自慢げに言う。
そんな様子をじっと眺めているとハルヒと目が合う。
『…何よ。』
『べ、別に』
俺のなんとも言えない様子を見てから少し考えたのち

『…まぁ、いっか。はい。』
そういってかばんからさっき見たのと同じ紙袋を取り出し、
俺に向かって突き出す。そのまま俺の座ってる机に置いてくれたらいいものを、
そこから動かないもんだから俺は立ち上がり受け取りに行く。
『ありがとよ。』
受け取る俺とは目線を合わせずに、
帰ろうとする3人のほうに向き直り
『帰り道で食べちゃダメよ。家に帰ってから食べなさい。』
などと小学生相手に向けた言葉かと思わせるような
ことを言いつつ見送る。
そしてドアが閉まる直前、古泉が
「頼みましたよ」と言わんばかりのアイコンタクトをしてきたことに
俺は少しの苛立ちを覚えた。
くそっ。それじゃまるで俺の一挙手一投足が
閉鎖空間を生み出さないために
仕方なくとった行動みたいになっちまうじゃねえか。
そうか、こいつの全てを見透かしたようなニヤケ面が

やけにムカつく理由はそこか。
言わせてもらうが、
俺はお前ら機関にとっての”ハルヒ落ち着かせ装置（ネーミングセンス皆無）”
じゃねえ。
俺の今までの行動は世界がどうだとか、
閉鎖空間がどうだとか、そんなことのためだけに取ってきたわけじゃない。
俺自身の意思でそうしてきただけだ。
…だから今だって
『なぁ。開けていいか。』
さっきまで座っていた席に腰を下ろしながら聞く。
せっかくなのでこの場で食べて感想を伝えてやりたいと、そう思っていた。
『別にいいけど。ちょっと一ついい？』
その場に立ったままのハルヒの逆質問に
俺は紙袋を閉じていたシールを剥がす手を止める。
『なんだ？』
『あんたさ、バレンタイン誰かにもらった？』
『もらってたとしたらどうなんだ？』

『別に、…どうもしないけど。』
明らかに不機嫌になるかと思いきや、
どことなく悲しそうな表情も入り混じっているように
見えたのは気のせいか？
まあ恐らく、閉鎖空間での俺の言動が本当かもしれないという
疑念を確信に変えようとしているんだろうな。
『安心しろ。誰からももらってねーよ。』
『何を安心するのか意味わかんないんだけど。』
ムスッと目線をそらしたかと思えば
少ししてからこっちに向き直り
『昨日、誰かにチョコもらってたわよね。』
きたか。
ここで閉鎖空間でのセリフをもう一度言うことは、
ハルヒにあれが現実に起きたことだと認識させてしまう
恐れがあることは重々わかっている。
しかしだな。
こんな勘違い、早く解消してやるべきだ。

それに、俺にだって伝えたいことがある。
世界がなんだ。そんなもんは知らん。
何か起こったら起こった時に考えればいい。

『あれはだな。谷口に渡して欲しいってお願いされたんだ』
そう伝えると何かを思い出そうとする素振りを見せたのち、
みるみるうちに驚きの表情に変わっていった。
『キョン…それって…ちょっと待って。でもあれは…』
ついでにもう一発かましとくか？
『だーかーらー、俺はまだ誰からもチョコを貰ってない。』
目の前でわかりやすくうろたえるハルヒ。
『何よそれ…。でも…こんなことってあるのね…。』
ハァとため息を一つつき、
『そんなことなら、昨日渡せば良かったわ。』
まったくだ。何を勘違いしてひよってるんだ、
この団長様は。
『俺はな、谷口みたいにチョコが楽しみで仕方ねぇ、

みたいな態度を出すのは憚られる《はばかられる》タイプなんだ。
『何よいきなり。』
つまりだ。
『バレンタイン？そういえばそんな行事あったなぁと
斜に構えておくことでもらえなかったときのダメージを受けないよう
保険をかけてたってわけだ。』
『へぇー。それで？』
『その結果、お前一人に決断を背負わせちまった。』
『意味わかんない。』
『あー、だからだなぁ…』
腹を割って話そうと思ったが、
いざ現実世界で目の前にすると結論を言うのを遠回しにしてしまう。
そりゃそうか。閉鎖空間でのハルヒは俺の発言を現実だと思ってない
わけだから、何を言ってもあくまで夢の中の俺が喋ってたことにできる。
あの時の俺は「チョコ待ってるからな」などと
かっこよく想いを伝えた気になっていたが、
それはただズルい立場からを伝えただけにすぎない。

悪かったなハルヒ。始めからこう言ってやればよかったのだ。

『俺は、お前のチョコが食べたいんだ。』

ハルヒは目線のやり場に困りながら
『だだだったら昨日のうちにそう言いなさいよっ!!』
顔を赤らめながらそう言った。
これは…夕日に照らされてそうなっている…わけではないだろうな。
『…今、食べてもいいわよ。』
言われなくてもそうさせてもらうさ。
俺は茶色の紙袋を閉じているシールを剥がし、
中を確認する。
ボール紙製の小箱。薄桃色のプリントが施され、
鮮やかな紅色のリボンで十字に結ばれている。
間違いない。これは閉鎖空間でハルヒが俺に渡そうとしたものだ。

リボンを解き箱を開けると直径５ｃｍほどの
ハート型チョコが３つ、逆三角の配置で入っていた。
表面にはホワイトチョコソースのようなもので
それぞれ「キ」「ヨ」「ン」と書いてある。
チョコに文字を書くのはそれなりに難しそうだなと考えながら、
一生懸命文字を描こうとしているハルヒの姿を想像し、
『ふっ』
鼻で笑いつつも顔がニヤケるのを制御する。
全く団長さんよ。こういうギャップ萌え的なサムシングは反則だぜ。
『何がおかしいのよ！』
『いや、不意打ちを食らったもんでな。』
そんなことを言いながら「キ」のチョコをつまみ上げる。
意外と厚みがあったので一口でいかず半分かじることにした。

外側は割とパリッとしたチョコだが
中には生チョコが入っているのか、とろっと口の中で溶ける。
味は少しビターな感じだ。

食レポなんてものは今までの人生でやったことが無いもんで
こんな風にしか伝えられないのだが。

それから目を閉じながらチョコを味わっていると
対面のイスに腰掛ける音が聞こえた。
時間をかけて咀嚼し
二口目のチョコを飲み込んだあと
「ヨ」のチョコをつまもうと目を開けると

頬杖をついてこちらをじっと見つめるハルヒと目が合った。
口角は少し上がっているもののニッコリ笑顔というわけでもなく、
かといって照れているわけでもなく、
まるで愛しい我が子を見つめるような、そんな表情をしていた。
何なんだよその表情。思わず目が泳いじまったじゃねぇか。

『なぁハルヒ。』
俺の呼びかけに対して声は出さず首だけ少し傾ける。

『チョコ、うまいぞ。』
『知ってる。』
なんだそりゃ。
俺の感想に大きな反応を示すわけでもなく、
さっきと変わらぬ表情で相変わらず見つめてきやがる。

聞こえてくる音といえば俺の咀嚼音と
ハルヒのゆっくりとした呼吸音だけのこの空間。

しばしの沈黙が流れたが、
正直全然いやじゃなかった。

顔の右半分だけが夕日に染まるハルヒを見ているだけで、
どこか別世界に来たんじゃないかと錯覚してしまいそうになる。
こんな時間がもう少し続けばいいと願う俺だったが

『そろそろ帰りましょ。』

チョコが後一つというところで現実に引き戻された。
『後一つ残ってるんだが。』
『家に帰ってから食べなさい。もう下校時間だから。』
もうそんな時間なのか。
たしかに部屋に差し込んでいた夕日も
今では部屋全体をほんのりオレンジに照らすくらいに落ち着いていた。
『じゃあ帰るか。』
そういってチョコの箱を閉め
紙袋に戻そうとした時、
一つの疑問が浮かぶ。
まてよ、この紙袋、
閉鎖空間で見たものと違わないか？
たしかあの時は黒くて光沢のあるようなものだった。
あれに比べると少し安っぽいものになってるような…。
ここでさらに疑問が浮かび上がる。
昨日の時点で俺以外の団員のチョコも作っていたのか？
そもそも昨日は部室に誰も来なかったから

単純に渡すタイミングが無かっただけとも考えられるが。
『なぁハルヒ。』
『何よ。』
いつもの白いダウンジャケットを着ようとしているハルヒは
手を止めることなくこちらを向き返事をする。
『昨日、俺にチョコを渡すのを躊躇したみたいだが、
他の団員にも渡しそびれていたのか？』
『あー。』
プチプチとボタンを止める手が止まる。
『…この際だから言うわ。
みんなの分のチョコはね、昨日の夜作ったのよ。』
昨日の夜？
てことはだ。昨日の下校前、俺にチョコを渡そうとした時点では
俺にしか作ってきていなかったってことか。
じゃあなぜ他の団員全員分作ることにしたんだ…？
いろいろと思考を巡らせているとハルヒが自ら答えを教えてくれた。
『なんか…、そっちのほうが渡しやすいじゃない。』

…ほう。てことはなんだ？
俺一人には渡しづらいから全員に渡しちまおうってことか。
考えやがった。
考えやがったが…だ。
なんとも言えない気分になるのはなぜだ。
まぁおおかた理由はわかっているんだが。

つまりは紙袋もみんなと同じものに成り下がり、
みんなと同じものの一つをもらっただけに過ぎないということが
ちいとばかし悔しかったんだろうな。
昨日の段階であれば世界にたった一つしかない
ハルヒのチョコを受け取ることができただろうに。
くそっ。
でもまぁ。

『渡してくれてありがとよ。』
『…ん。別にいいわよ。あたしが渡さなかったら

一つももらえなかったことになるんだから。
それじゃ可愛そうでしょ？』
いやいや。わかってねぇなお前は。
俺はただの一つでいい。
ただの一つ、欲しかったんだ。
お前からのチョコが。

夕日は沈み、下校の準備をする運動部たちを横目に
俺たちは校門を出た。

『あ、そういや俺、昨日チョコもらったんだった。』
『はぁ？誰からよ。』
『ん？そりゃもう、小柄な女性からだよ

『妹ちゃんね。』
はえーよ。
『じゃあ私からのチョコはいらなかったわね。
『いやいる。』
俺の即答返しにびくっとなってこっちを見る。
その後フフと少し笑い、
『これはホワイトデー期待しとかなきゃね。』
どこか楽しそうにつぶやく。
『じゃあ手作りチョコのお返しといくか』
『キョンが作ったら泥みたいなチョコしかできないでしょ。』
こいつ。
『レシピさえしっかり見りゃ俺にだって作れるさ。』
『何それ。チョコレート作りを馬鹿にしたような言い草ね。』
いや、誰でも作れるのは疑いようのない事実だろう。
がしかし、
『大事なのは誰が作って誰が受け取るかってとこだろ？』
『そりゃそうね。』

『俺がもしホワイトデーに泥みたいなチョコを作ったとしても、
それを受け取る人によっちゃあ
高級チョコ顔負けのかけがえのないものになるんだろうな。』
言い終わると同時に
「何を言ってるんだこいつは」と言わんばかりの
表情が目に入る。
『うーん。あ、それならもういっそ高級チョコ食べてみたいわね！
ホワイトデーはデパートとかに売ってる高いのでよろしくぅ！』
そうくるか…。
『どれがいいかわからんから、その時一緒に選びに行こうぜ。』
何気なく言ったつもりだったが
それを聞いたハルヒは一瞬驚いた表情を見せたかと思うと、
パッとニッコリ笑顔になり食いついてきた。
『ほんとに!?それは楽しみね！ちゃんと覚えときなさいよ!?
忘れたらそうね……本当にチョコレート作ってもらうから！』
やれやれ。高級チョコって果たしていくらくらいのものを
想像してやがるのやら。小遣い一ヶ月分で収まればいいが。

というか罰であるチョコ作りのほうが安上がりなのでは？
なんて考えながらどっちがマシか一応吟味してみたのだが…

正直どっちに転んでも楽しみだと思う自分がいた。

いつもの俺であればまた面倒なことに付き合わされるのかと
ダウナーな気分になっているんだろうが、
今日の俺は少し違うらしい。
それはチョコを無事もらうことができた
高揚感からなのか、はたまた
夕日の差し込む部室で見たハルヒの姿に思わず
釘付けになったからなのか。そこのところよくわからん。
でもきっとハルヒも同じように楽しみに思ってることだろう。
いや、そうであって欲しい。
なぜかって？
そりゃもう、
何ていうか…あれだ。

”そうなればホワイトデーまでの一ヶ月間、
閉鎖空間が出現することだってないだろう?”
ここはそういうことにしておいてくれ。

ハルヒとの会話もそこそこに交わしつつ
俺たちは各々帰路についた。
別れ際、ひらひらと手を振るハルヒの足取りは
ここ最近で一番軽いように見えた。
こちらもすぐに翻して《ひるがえして》
帰ってもよかったんだが、
今日はそのうしろ姿が見えなくなるまで
ぼんやりと眺めていた。

翌日。

ハルヒは用があるとかで6限目の授業が終わると同時に
颯爽と帰っていった。
俺も帰ろうか迷ったが、特にすることもないので
なんとなしに部室へ足を運ぶ。

ハルヒがいないということは部室内で強制お着替えが
繰り広げられている心配はないだろうが、
一応ノックする。
『はぁ～い。』
天使の呼び声が聞こえる。
ドアを開けるとハルヒを除く団員全員が揃っていた。
『キョンくんこんにちは～
『どうも。』
朝比奈さんの癒やしボイスをかき消すなニヤケ野郎。
にしても授業が終わった直後なのにもうみんな集まってるなんて、
なんだか俺を待っていたみたいじゃねぇか。
『昨日はいかがでしたか?』

なんだなんだ。昨日の反省会でもするつもりか？
どうせ何かのインチキパワーを使って俺たちのことを見ていたんだろうが。
『いえ、我々の力は別に遠隔で
何もかも見透かせるというわけではないんです。
観測できるのは涼宮さんが閉鎖空間を生み出したかどうか、
そして閉鎖空間内での出来事に限られる。
だからこそあなたの行動にかかっていたんですよ。』
そうかい。
『結局、普通に今日がやってきたわけだから、
これで問題はなかったんだろう？』
『ええ。さすがとしか言いようがありません。
一昨日の深夜以降、閉鎖空間は出現していませんからね。』
なんだかしらんが、俺は俺のやりたいように
やらせてもらっただけなんだがな。
『そういや、お前もチョコもらってたよな。』
『ええ。非常に美味でしたね。』
まったく、何の苦労もせずにハルヒのチョコにありつきやがって。

『あ、涼宮さんのチョコとっても美味しかったですう。』
朝比奈さんはどうぞどうぞありついちゃってください。
『…。』
『長門は食べたのか？』
『……食べた。』
『おいしかったか？』
コクンと頷く。
確かにあれはうまかったからな。
宇宙人の舌をも唸らせるとは、
ハルヒのやつなかなかやるじゃあないか。
それから視線を古泉に戻し、
『ちなみにお前のにはなんて書いてあったんだ？』
なんとなく気になったから聞いてみる。
すると予想外の言葉が返ってきた。
『おや、何のことでしょう。
何かメッセージカードでも入っていたのですか？』
しらばっくれているのか？こいつは。

『チョコに名前か何か書いてあったんじゃないのか？』
俺がよりわかりやすく説明してやっても
いまいちピンと来てないような表情を見せる古泉。
『はて。僕がもらったものには何も書かれていませんでしたが。
朝比奈さんはどうでしたか？』
『わ、私のも何も書かれてませんでしたっ。
涼宮さんからのチョコレートって、
丸いトリュフでしたよね？』

丸いトリュフ???

『ええ、まさにそれです。
そもそも丸いチョコに文字を書くのは難しいと思われますが。』

そうか。

みんなと同じものの一つ、じゃなかったんだな。

『どうかされましたか？』
『いや、なんでもない。』
俺は平静を装いつつ、
続いてわざとらしくこう言ってやった。
『うまかったよな、トリュフ。』

不自然に答える俺に
怪訝《けげん》な表情を浮かべる古泉と、
不思議そうに首をかしげる朝比奈さん。
別に本当のことを言っても良かったのだが、
どうせまた「おやおや」などと言いながら
ニヤけ顔を見せつけられるだけだろうし？
ここは俺の胸の内に秘めておくことにしよう。

にしても、

ハルヒのやつ、やってくれるぜ。
時間差で真実が分かるようにしたのが意図的だとしたら、
俺はそれにまんまとしてやられたことになる。
まあ恐らくそんなことまで考えてはいなかっただろうが。
ひょっとしてお前は人を振り回すだけが取り柄じゃなく、
人を喜ばせる才能もあるんじゃないか？
それならそっちにシフトチェンジしたほうが世のため人のため、
そして何よりお前自身のためになると、俺は思うがね。

――――――――――――――

1日遅れのバレンタイン。
遅れてやってきたのは
チョコと、それから

ハルヒの想いだった。